大正大学附属図書館蔵東叡山寛永寺旧蔵版木の意義

――了翁祖休と勧学講院をめぐって――

渡　辺　麻里子

【キーワード】了翁、版木、寛永寺、勧学講院

はじめに

大正大学附属図書館には、かつて東叡山寛永寺の勧学講院で版行した版木が所蔵されている。寛永寺の勧学講院は、了翁祖休（道覚、一六三〇～一七〇九）が寛永寺に建てた勧学寮を創始とし、明治維新の後には天台宗大学から大正大学へと変遷する。現在の大正大学においては寛永寺勧学講院はその起源の一つであり、勧学講院では様々な書目が版行されていたが、その版木が現在の大正大学に遺されているのである。本稿では、歴史的にも大変貴重な資料であるその版木を調査した結果と、版木の内容や意義について述べる。

寛永寺勧学講院が所蔵していた版木が、大正大学附属図書館に移された歴史的経緯については、塩入法道氏の解説「東叡山寛永寺旧蔵経論版木」（『大正大学所蔵資料図録――仏教編――』所載、以下「図録解説」と称す[1]）に詳しい。塩入氏の解説によると、幕末の慶応四年（一八六八）に官軍と彰義隊とが戦う上野戦争が起こった折に、戦禍から版木を守るため、当時、寛永寺寒松院の住職であった多田孝泉氏が、甥の多田孝誠氏が住持をしていた神奈川県秦野の命徳寺に避難させた。当時、版木と蔵書を運ぶのに、牛車六十台を要してもなおすべてを運ぶことができなかったという。やむを得ず、神楽坂の民家にとりあえず預けられたものもあり、後に、多田厚隆氏（大正大学元教授）が確認したところ、一部を除いて残りは薪にされてしまったとのことであった。

後に、大正大学が現在の地に設立した際に、遺されていた版木が寄贈された。そこで現在、大正大学附属図書館で保管されているのである[2]。勧学講院における学問の実態を知るための重要な資料であり、大正大学の起源の一つである勧学講院の旧蔵資料という点からも、極めて貴重な資料であるといえるだろう。

図録解説には、大正大学への来歴や、版木の枚数などの概要が示されていた。それを参照しつつ、この度、大正大学附属図書館の許可をいただいて改めて調査を行った。ここに版木調査の結果を具体的に報告し、寛永寺勧学講院旧蔵版木の意義を検討する。

一、大正大学附属図書館蔵東叡山寛永寺旧蔵版木の調査概要

版木調査は、二〇二二年二月から二〇二三年三月にかけて、総計八回、日数にして十一日をかけて行った。具体的な日程は以下の通りである。また調査には日本文学科の教員および有志学生が参加し、版木のデータの採録や写真撮影などの悉皆調査を実施した。[3]

・第一回（予備調査）二〇二二年二月一五日
・第二回　二〇二二年八月一七日～一八日
・第三回　二〇二二年九月一五日
・第四回　二〇二二年九月二〇日～二一日
・第五回　二〇二二年一〇月三日
・第六回　二〇二二年一〇月二四日
・第七回　二〇二三年二月二一日・二二日
・第八回　二〇二三年二月二八日～三月一日

調査では、版木、全二百九十七枚について、一枚ずつ、調査カードに寸法や状態を記録した。また記録用に、全版木の表面・裏面を写真撮影した。調査カードには、一枚一枚の版木について、以下の項目について調査し、版木の調査カードに記録した。

①番号……所蔵者整理番号
②内容の区分……本文／その他（見返、題箋、刊記、序、跋、目録、その他）
③表裏の区分……表／裏、上下・左右
④題名……内題、尾題、見返題、外題（題箋）、序、跋、目録、その他
⑤版心（柱）……部門、版心題、巻数、丁数
⑥備考……版木の状態、内容など
⑦把手木……有無（左右）
⑧寸法……全体（全長縦、横、厚さ（版木中央））
　把手木（厚さ、幅（横））
　版木本体（縦、横）
　版面外側（版面天、版面地、版面外横幅㋐未刻／㋑刻）
　版面内側（匡郭）（縦、横1（一丁片面）、横2（一丁両面）、横3（版心幅））
　その他
⑨その他　特に注目される点

①の「所蔵者整理番号」は、大正大学附属図書館で付している番号を記した。②の「内容」の区分は、その版木が、書目の本文か、題箋など本文以外のものを刻しているかを確認した。

③の「表裏」の区分は、版木の表面・裏面は、特に区別がある訳ではないが、丁数の小さな番号の面を「表」とした。また表面・裏面については、版木の上下の使い方が書目によって異なることに気づき、上下・左右のいずれかを示した。稿末に付した一覧表ではこの項目は掲載を略したが、書目によって表裏の使い方、上下左右の向きが異なることが確認できた。

④の「題名」は、版木の書目の題名を記した。題名は、内題・外題、題箋、版心題、序題、跋題など、確認できる箇所から拾い上げた。⑤の「版心（柱）」では、版心題で書目を確認し、巻数や丁数を確認した。また版心は魚尾だけでなく、書目ごとに様々な特徴があるため、調査カードには版心は版木を見つつ忠実に転記した。

⑥の「備考」は、内容の特徴や、版木の状態で特筆することがある場合など、右記の項目に含まれない点について、実物を見て判明したことを記した。⑦の「把手木」は、その有無を記し、表面から見た左・右にそれぞれ付されているか、現状を示した。把手木は、もともと付されていても、現在は取れてしまったものもあり、現状の確認としてその有無を記した。

⑧の「寸法」は、以下の項目について、版木一枚ずつ、すべて採寸を行った。「全体」というのは、把手木を含めた板木全体の寸法である。全長の縦、横を計測し、版木の厚さは版木の中央部分で計測した。「把手木」については、把手木の厚さと横幅を記した。把手木は、版木よりも長く・太いものが多いが、中には、版木よりも短かったり、厚さもほぼ同じというものもあった。「版木本体」は、把手木を除いた版木本体について、その縦と横の寸法を計測した。

「版面外側」は、版面の匡郭より外側について計測した。「版面天」は、匡郭の上部から版木の上部の端までの間の長さ、「版面地」はその逆で、匡郭の下部から版木の下部の端までの長さ、「版面外横幅」は、匡郭から版木の左右の端までの長さであるが、「㋐未刻」は、板を全く彫っていない部分の長さ（幅）、「㋑刻」は、何らかの掘りがある箇所の幅を記した。「版面内側（匡郭）」は、匡郭の縦横について、内法で計測した。縦は匡郭内側の縦、「横1」は一丁の片面の横幅（匡郭から版心まで）、「横2」は一丁の両面（匡郭から匡郭まで、一丁分の横幅）、「横3」は版心の幅を計測した。その他、題簽や刊記など、形状の異なるものについては、それぞれの縦横の寸法や、配置（題箋と題箋の間、題箋と刊記の間など）を計測した。これらの寸法は、版木ごとの比較に用いるデータとして採寸した。

⑨の「その他」は、欄外注記の枠など、その他に個別に特記すべき寸法がある場合に計測した。また刊記など、転記すべきと判断されるものは全て転記した。

以上の点を各々計測し、その他気付いたことを適宜記録しながら調査カードを作成し、日付と調査者氏名を記した。版木一枚の片面ごとに一枚の調査カードを使い、記入事項が多い場合は、二枚目以上を用いた。基本的には、版木の表面で一枚、裏面で一枚と、版木一枚ごとに二枚の調査カードを作成して調査を進めた。

以上のように版木二九七枚についての情報を採取し、調査カードに記入した。本稿末の付表は、それらのデータを一覧に

まとめて掲載したものである。

本稿末の「〈付表〉大正大学附属図書館蔵東叡山寛永寺旧蔵版木一覧」は、データを以下のように示している。左の列から、1～297の通番は、1（1枚目の版木）～297（二九七枚目の版木）として、版木に新しく付した版木全体の通番号である。次の経典番号は、A～U（Uは五枚五点）の二十六の書目について、適宜、A～Uのアルファベットを振ったものである。その次の「子番号」は、書名ごとに版木に番号を振ったもので、A1は『観音玄義記講義』の一枚目の版木、B1は『十不二門指要鈔会本』の一枚目の版木、ということになる。所蔵番号は、現在の図書館で付されている版木の番号（ただし、33～50、97～100、289～299）は欠番で、その番号に該当する版木はない。また四百番代の数字は、現在図書館で「緑」の札で番号が付されている版木で、401は、緑の1番の意味である。表裏の欄は、丁数の若い番号が付されている面を「表」とし、表面に1、裏面に2と記入した。書名はその経典の書名を、内題・尾題・版心題などで確認して記入した。題名の表記が異なる場合は、本文の解説部分で記した。次に「内容（本文・別）」の欄であるが、ここでは本文が彫られた板か、その他の見返・題箋・刊記などを彫られた板かどうかを示した。

次の寸法の欄は、把手木も含めた版木全体の縦・横の寸法を示した。匡郭は、匡郭の内法の縦・横を示した。横1は一丁の半面（一頁分）を、横2は、一丁分（二頁分）を示している。把手木の欄は、○は左右ともに付いている状態、×は左右ともに付いていない状態（もともと無いもの、もとはあったが外れたもののいずれも含む）、△は、片方のみ付いていて片方はない状態を表している。その他、特記すべきことは本文中で解説をした。

二、大正大学附属図書館蔵東叡山寛永寺旧蔵版木の内容

次に、東叡山寛永寺旧蔵版木についての具体的な内容について述べる。版木の枚数は、全部で二百九十七枚であった。図録解説では、二百九十枚と記されているため、若干の相違がある。

〔表一〕 経名ごとの版木枚数

通番	経名	図録解説	版木枚数	増減
A	観音玄義記講義	七一	七一（巻一㉔、巻二㉒、巻三⑫、巻四⑫、題箋等①）	0
B	十不二門指要鈔会本	四〇	四〇（序③、巻上⑰、巻下⑲、題箋等①）	0
C	金剛錍巾免解	三一	三一（巻上⑯、巻下⑭、刊記①）	0
D	維摩詰経三観玄義（浄名経三観玄義）	二〇	二〇（序①、巻上⑩、巻下⑨）	0
E	六妙法門	一六	一六	0
F	請観音経疏	一四	一四	0
G	講演法華儀	一四	一六（巻上⑦、巻下⑦、刊記など②）	＋2

H	四教略頌	三	三	0
I	五時略頌	三	三	0
J	般若心経夢性解	九	一〇	+1
K	不動尊秘密陀羅尼経	五	五	0
L	礼弥陀懺儀	五	六	+1
L	礼法華経儀	三	三	0
M	天台大師和讃	五	五	0
N	天台円宗遮止両業勤行式	八	八	0
O	晨昏課誦	九	九	0
P	因果経和讃・善悪種蒔鏡	一〇	一〇	0
Q	仏隴百絶	一〇	一〇	0
R	梵漢対訳字類編	八	八	0
S	霊峰宗論	〇	三	+3
T	法語承習	〇	一	+1
U	その他	六	五	△1
	合　計	二九〇	二九七	+7

＊（　）内は内訳。〇内は枚数。

それぞれの経典ごとに、内容を確認し、特徴をみていくことにする。経典の番号は、適宜、AからUまでのアルファベットを振った。以下、稿末の「〈付表〉大正大学附属図書館蔵東叡山旧蔵版木一覧」を参照しながら読んでいただきたい。

Aの『観音玄義記講義』は、慧澄癡空が万延元年（一八六〇）に『観音玄義記』を講義したもので、万延二年の版本が広く知られている。『観音玄義記』は、天台大師智顗の説を灌頂が記した『観音玄義』を、宋の四明尊者知礼が註解したもので、知礼が六十二歳の折の撰述とされる。

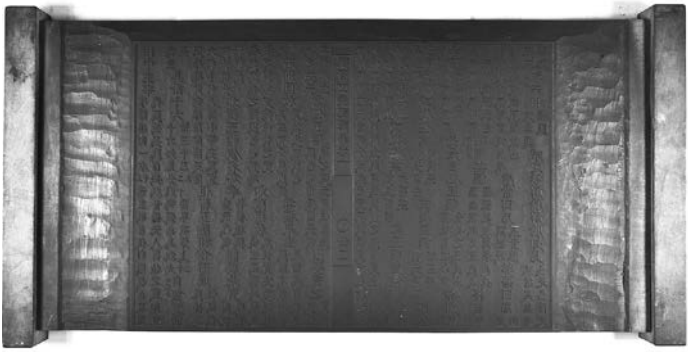
慧澄癡空（一七八〇～一八六二）は近江国仰木の出身で、比叡山安楽律院の覚忍を師として受戒し、大雲の法嗣となる。また海忍から八斎戒を受け、仁海にも師事した。三十歳で講筵を開き、以来多くの講義を行って、天台教義の流布に努めた学僧であった。著作にはこの『観音玄義講義』の他、『十不二門指要鈔講義』二巻、『妙宗鈔講翼』一巻、『法華玄義講義』十巻などが知られている。

『観音玄義記講義』の版木は、全部で七十一枚を確認した。一枚の版木に表裏一丁ずつが彫られていて（写真1）、版面より長く厚みもある把手木が左右に付いている。一面の行数は七行。版木の下方に㋑という焼付印がある。寸法は、一枚目の場合、把手木も入れた版木全体で縦二三・六×横四七・二糎、版木本体で縦二一・六×横四〇・九糎である。匡郭の内法は、縦一九・六×横一三・六糎、一丁分の横は二八・七糎となっている。また一面行数は七行、一行字数は二十二字である。

巻第一は第一丁～五十二丁まで（ただし、第十五・十六丁、四十三・四十四丁の版木は欠）の二十四枚が存する。[4] 巻第二は第一丁～四十四丁まで（ただし、第三十五・三十六丁の版木は欠）の二十三枚、巻第三は第一丁～二十三丁まで（第二十三丁の裏面は未刻）の十二枚、巻四は第一丁～二十三丁（第二十三丁の右面は未刻、裏面に巻第一～四の題箋四枚）の十二枚で合計七十枚、七十一枚目の版木には、表面に見返と題箋が、裏面

には刊記が彫られている。

巻一以下の内題には「観音玄義記講義巻一（二～四）　沙門癡空撰」とあり、尾題には「観音玄義記講義巻一（～三）」とある。七十枚目の題箋には、「観音玄義記講義三四止／観音玄義記講義二／観音玄義記講義一」とある。七十一枚目の表面には見返が彫られ「全部三冊／観音玄義記講義／慧澄和尚著」とある。題箋の枠のみのものも彫られている。七十一枚目裏面には刊記が二点ある。刊記①には「台宗書林／江戸下谷廣徳寺前／和泉屋庄次郎／御製本所／萬延二年（一八六一）辛酉春二月」とあり、刊記②には「東叡山勧学講院蔵版」とある。「勧学講院」での出版物であることや、東叡山勧学講院の出版を江戸の和泉屋庄次郎が請け負っていることがわかる。



〔写真１〕　A『観音玄義記講義』

Bの『十不二門指要鈔会本』は、宋の四明知礼の著作である『十不二門指要鈔』に、慧澄癡空が注釈を付けたものである。趙宋時代に、『金光明玄義』の広略問題から山家山外の論争が起きて七年にも渉って続いた。山外の源清は『十不二門珠指』を、宗昱は『註不二門』を著した。『十不二門指要鈔』は、この二書に対して四明知礼が自己の所見を記して二書を反駁したものである。『十不二門』の注釈は、中国で八種、日本で十五部が確認されているが、日本で最も広く用いられたのがこの知礼の『十不二門指要鈔』である。『十不二門指要鈔』の注釈は、刊本写本など、十余種類作られたとされる。その内の一つが、本書、慧澄癡空の『十不二門指要鈔会本』であった。「会本」とは、本文とは別に用いられている注釈書を、本文の各部分と合わせて、一本にした書籍のことで、中国の宋朝以後の刊行本に多い形式である。

版木の見返には「天台宗大学林支那蔵版」とあり、「天台宗大学林」での版行とわかる。跋題には「重刻十不二門指要鈔跋」とあり、跋末には「明治甲申（明治十七年、一八八四）春／小教正多田孝泉謹誌／水戸善男子小林茂敬書」とある。慧澄癡空は、文化九年（一八一二）から六年間にわたって東叡山に住し、その間、天台教学の講筵を行った。その折、小教正多田孝泉は講筵に連なり、講義を筆録し、それを小林茂敬が筆写して版木に起こしたものと記されている。多田孝泉は、寛永寺寒松院第二十三代の住職で、国学者でもある。湯島聖堂の教授を務め、明治になってからは、神官の教育にもかかわったとのことである。[5]

『十不二門指要鈔会本』の版木は、一枚の版木に、表裏一丁

〔写真２〕 B『十不二門指要鈔会本』

ずつが彫られている（写真2）。把手木は、版木より短く薄いものが付く。頭注が彫られるが、巻上第九丁は、注が外付になっていて、釘三本を使って版木に止められている。所々、版面の文字の欠けたところが確認できる。寸法は、第一枚目の場合、把手木を含めた全体で、縦二二・九×横四一・八糎、版木本体で、縦二二・八×横三七・七糎である。匡郭は、内法で縦一九・六×横一三・五糎、一丁全体で横二九・一糎となっている。また一面行数は十行、一行字数は二十字である。

全部で版木は四〇枚あり、序が三枚、巻上が第一丁～三十四丁までの十七枚、巻下は第一丁～三十八丁までの十九枚、最後の四十枚目は、表面に表見返と題箋、裏面に跋文を載せる。

一枚目二枚目は序で、序一は、序題に「指要鈔序」、序題次行に「宋東山沙門遵式述」とある。また序二は、序題に「十不二門指要鈔会本序」とあり、序末に「東台浄名輪住苾蒭癡空題嘉永壬子（嘉永五年、一八五二）季冬」とある。三枚目の版木は「凡例」で、凡例末には「日光侑学沙門慈観識」とある。慈観（一七九四～一八六六）は、輪王寺修学院の僧である。文化二年（一八〇五）日光山華蔵院の慈傍について出家し、華蔵院を経て、嘉永元年（一八四八）に修学院の住持となった。大僧正にのぼり、学頭を務めた学匠である。慶応二年に七十三歳で亡くなった。「無為道人」「功徳林院」などと号した。慶応二年（一八六六）に開いたとされる滝は、慈観滝と称され、現在も日光の観光名所となっている。

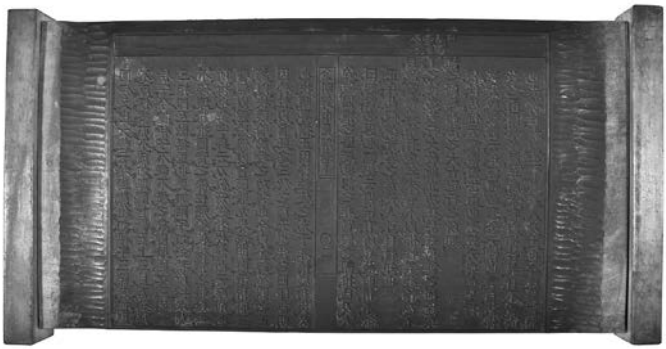
内題には「十不二門指要鈔会本巻上（下）／十不二門指要鈔会本上（下）／宗　四明　沙門　知禮述」とあり、版心題には「支那撰述／十不二門指要鈔会本巻上（下）」、尾題に「十不二門指要鈔会本巻上（下）」とある。巻上の第二十丁のみ、版心が「十不二門指要鈔会本巻二」となっている。丁付は、一丁ずつ進み、第一丁の裏に第二丁となるが、二枚だけずれがあり、巻上第十一丁の裏が十五丁、巻上第十二丁の裏面が第十六丁となっている。

題箋には「支那撰述／十不二門指要鈔会本上（下）」とある。見返に「天台宗大学林支那蔵版／十不二門指要鈔／支那撰述」とあり、「天台宗大学」の名が見える。

Bの四十枚目の版木表面には、題箋と見返があり、題箋には「支那撰述／十不二門指要鈔会本上（下）」とあり、見返には「天台宗大学林支那蔵版／十不二門指要鈔／支那撰述」とある。ま

たその裏面には、跋がある。跋題には「重刻十不二門指要鈔跋」とあり、跋末には「明治甲申（明治十七年、一八八四）春／小教正多田孝泉謹誌／水戸善男子小林茂敬書」とある。

次に、Cの『金剛錍巾免解』は『金剛錍』の数ある註釈書の一つで、本版木は龍淵の述、安政二年（一八五五）に刊行されている。



〔写真３〕 C『金剛錍巾免解』

『金剛錍巾免解』の版木は、一枚の版木に片側に一丁分、裏表で二丁分が彫られている（写真3）。把手木は版木よりも長く厚い。全体の寸法は、縦二四・四×横四七・二糎、版木本体は、縦二二・二×横四二・二糎である。匡郭の内法は、縦が二〇・七糎、横は、一面が一四・六糎、一丁全体で、三〇・七糎である。一面行数は十行、一行字数は二十字。頭注が付される。

版木は全部で、三十一枚で、一枚目が序と叙、二枚目が自序、三枚目から十六枚目までの十四枚が、巻上の第一丁～二十八丁である。十七枚目から三十枚目までが、巻下第一丁～二十八丁の十四丁で、最後の三十一枚目は、表面に見返と題箋、裏面に刊記を記す。

内題は、「金剛錍巾免解巻上（下）」とあり、内題脇に「日東沙門　龍淵述」とある。版心題は「金剛錍巾免解巻上（下）」で、尾題も「金剛錍巾免解巻上（下）」とする。

一枚目の版木は、序で、序末には「安政二乙卯（一八五五）年孟春今日／洛陽金讃嶺教頭澄困撰」とある。また別に自序があり、自序末に「序者、日本安政二乙卯孟春穀日／幻成道人龍淵撰」とある。また二枚目に叙があり、叙末に「安政二年乙卯（一八五五）中春望日／東台嶺学正沙門文淵謹識」とある。

三十一枚目は、表面に、表見返と題箋二枚、裏面には刊記が二点ある。刊記一には、「乗寛／證淵／心淵／澄淵／覚淵／文淵　戮力出貲鐫版／東叡山勧学校院蔵版」とあり、刊記二には、「安政二乙卯（一八五五）年三月刻成／御製本所／台宗書林／江戸下谷廣徳寺前／和泉屋庄次郎」とあり。この刊記も、Aの『観音玄義記講義』と同様、東叡山勧学校院の蔵版を、和泉屋庄次郎に託していることが確認できる。

Dの『維摩詰経三観玄義（浄名経三観玄義）』二巻は、天台大師智顗の著作である。智顗は、先に、『維摩経玄義』十巻があり、一部の文疏と一緒に煬帝に送っていたが、晩年に至り、煬帝の懇望によって『維摩経』の釈を作り、新たに玄疏六巻（略玄）を作り、文疏二十五巻と一緒に煬帝に送ったという。本書には天台所立の四教の要旨や三観の義旨を知る上で、他書には

〔写真４〕　Ｄ『維摩詰経三観玄義』

見られない特長があり、後に十巻の玄義を、四教・三観・四悉檀の三部に分けてまとめ、別称を付けて後世に伝えたもので、日本には慈覚大師円仁が伝えたとされる。

『維摩詰経三観玄義（浄名経観音玄義）』の版木は、全部で二十枚である（写真4）。巻上は第一丁～二十五丁までの十枚と、巻下の第一丁～第三十三丁までの十枚である。一枚の版木に、表裏二丁（二面）ずつ合計四丁（四面）彫っている版木と、巻上十三丁～二十五丁までは、一枚の版木に、表裏各一丁（一面）ずつ彫っている版木とが混じっている。また、上巻の第二十三丁は、表面のみを使い、裏面は未刻（まだ二十四丁・二十五丁もあり、最終丁ではない）、下巻では、第八丁の隣に第十二丁、裏に第十三・十四丁を入れた版木があったり、第九丁の隣は、一丁分空いているなど、丁数と版木の順番に変則的な箇所が見られる。

『維摩詰経三観玄義』の寸法は、片面に一丁ずつ、一枚の版木に二丁が彫られている版木の寸法は、全体で縦二七・三×横四七・一糎版木本体で縦二五・〇×横四二・〇糎である。匡郭は縦二三・三×横一五・九、一丁分の横は、三三・一糎である。また片面に二丁ずつの版木は、全体で縦二七・三×横八八・一糎版木本体で縦二四・六×横八四・八糎と、長い版木である。把手木は、幅があり、版木より長くて厚いものとなっている。各版木の把手木には、「三観上　初四」「三観上　二三」などと墨書があり、上巻の初丁（第一丁）と第四丁、第二丁と三丁がある版木だと示している。各丁、上部に注の欄があり、頭注が刻まれる。一面行数は十行、一行字数は十八字である。

内題は上巻に「古本作三観義巻上／維摩詰経三観玄義巻上／古本無／隋天台山修禅寺沙門智顗撰／古作智者大師」とあり、下巻に「「古本作三観義巻下／維摩詰経三観玄義巻下」とある。版心題は「浄名経三観玄義巻上　十七」とあり、尾題は「士作三観義巻上終／維摩詰経三観玄義巻上（下）」とある。

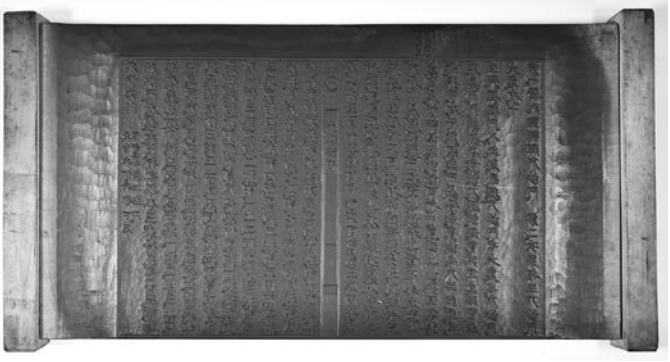
第一枚目は、序で表面は序の第一丁と第二丁、裏面は第三丁が彫られる。序には界線があり、界幅は二・五糎である。序題には「新刻三観義序」とあり、序末に「時／天明戊申（天明八年、一七八八年）秋九月東叡山／凌雲院僧正智願海蔵撰」とある。凌雲院は東叡山寛永寺の子院の一つである。[6] 三代将軍徳川家光の師となる亮運（～一六四八、九〇歳）は凌雲院に住して学頭職を務め、徳川将軍は、代々凌雲院に帰依した。

二十枚目の版木には題箋と刊記がある。題箋には「浄名経三観玄義」とあり、刊記には「新刻浄名経三観玄義二巻／資金貳拾両常州真壁郡山田村連上院／為妙心院乗閑證得菩薩寄捨之／

天明第八歳次戊申秋」「東叡山勧学校蔵／浅草新寺町／台宗書林和泉屋庄次郎」とあり、天明八年（一七八八）秋に、東叡山勧学校の版を和泉屋庄次郎が刊行したことがわかる。

Eの『六妙法門』は、天台大師智顗の述作で、陳の尚書令毛喜の請によって金陵の瓦官寺にて、光大元年（五六七）から大建七年までの八年間に説かれたものとされる。内容は、天台三種止観の一つである不定止観法門を説いたもので、「六妙門」の名義と大意を示している。天台止観法門の初学指南として、『小止観』と共に重視された。なお『国書総目録』などでは、他に明暦三年の版本が確認されている。

大正大学蔵『六妙法門』の版木は、一面に一丁、表裏で二丁が彫られている（写真5）。版木より厚く長い把手木が付く。版木全体の寸法は、全体で縦二四・五×横四七・一糎版木本体で縦二二・八×横四二・四糎である。匡郭があり、内法は縦二〇・〇、一面の横一四・七糎で、一丁分の横は三〇・九糎となっている。一面行数は十行、一行字数は二十字である。



〔写真5〕 E『六妙法門』

版木は全部で十六枚、一枚目は序と凡例、二枚目から十五枚目が本文一丁目～二十五丁までで、十五枚目の裏は後序、十六枚目は見返と題箋・刊記が彫られている。枠を付した頭注があり、第八丁など、欄外頭注の木が枠からはみ出ているものもあった。

内題には「六妙法門〈天台大師於都下尾／官寺略出此法門〉」、版心には「六妙法門　一」（数字は丁付）、尾題には「六妙法門終」とある。また題箋には「〈文化校刻〉六妙法門　全」とあり、序題には「再刻六妙門序」とある。刊記には年記が記されないが、序末に「文化辛未季秋僧正慈等述」とあることから、文化辛未（文化八年、一八一一）年の刊行と推察される。

見返には「東叡山勧学校蔵挍／〈新刻〉六妙法門／不許翻刻千里必究」とあり、凡例末には「東叡山勧学校　沙門考田　謹識」とある。また刊記には、「東叡山勧学校蔵板」「東都書林／浅草新寺町　和泉屋庄治郎／本石町十軒店　英平吉／謹行」とある。

Fの『請観音経疏』は、天台大師智顗の説を灌頂が記したもので、本書もまた天台の重書である。経題を五重玄義で略釈し、経文を分化して解釈し、四教三観に約して観音の六字章句陀羅尼の体用を通釈別釈したものである。

『請観音経疏』の版木は、全部で十四枚が存する。一枚の版

〔写真６〕 F『請観音経疏』

木の片面に二丁、裏表に四丁を彫る（写真６）。丁付は、順番に連続しておらず、一枚目の版木は、表面が第一・三丁、裏面は十・十四丁、二枚目の版木は、表面に第二・十七丁、裏面に第四・八丁といった具合である。

『請観音経疏』の版木の寸法は、全体で縦二三・二×横八三・七糎、版木本体で縦二一・二×横七九・〇糎である。匡郭があり、内法で縦一八・七×横一四・〇、一丁分で二九・二糎となっている。把手木は、版木より長く厚いものが左右に付いている。一面行数は十行、一行字数は十八字である。

内題に「請観音経疏／隋天台智者大師説／弟子頂法師記」とあり、第五十五丁の尾題には「請観世音菩薩」とある。十四枚目の版木は、表面に五十三丁と五十四丁、裏面に最終丁の第五十五丁の本文と、題箋、刊記が彫られている。題箋に「支那撰述　請観音経疏会本　全」とある。刊記には「東叡山勧学講院蔵板常州河原代安楽寺隠恵菴貫周寄附之／文化十四丁丑歳（一八一七）十一月吉旦／東都書林　東叡山池之端須原屋伊八／浅草新寺町和泉屋庄次郎」と彫られている。

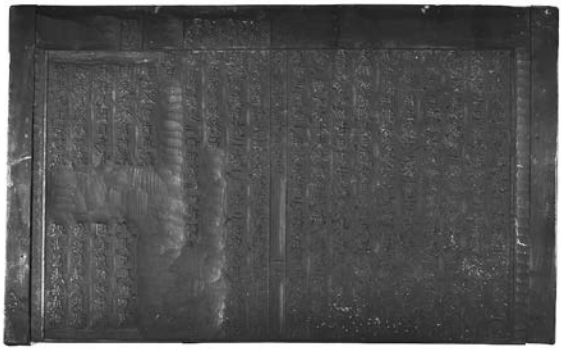
G『講演法華儀』は、貞観九年（八六七）六月に成立した智証大師円珍の撰述である。『法華経』と『大日経』の一致、つまり顕密一致を述べようとし、開経の『無量義経』と結経の『観普賢菩薩行法経』と『法華経』二十八品との略解を顕密一致の方針で論じている。大正大学の版木は、凡例末に「藕峰釋敬光謹識」とし、天台寺門僧の学僧で法明院に住した敬光の名を記す。敬光（一七四〇～一七九五）は、幅広い学問を積み、他宗の教義にも通じ、密教・禅・円頓戒を復興し、日本天台の再建を目指した学匠である。『円戒膚談』『山家学則』『大日経心目講翼』など、著作も多く存する。

『講演法華儀』の版木は、一枚の版木に、片面に一丁、裏表で二丁が彫られている（写真７）。把手木は版木とほぼ同じ長さで同じ厚さの細いものである。巻上は第三丁～二十七まで確認できるが、途中、第一丁・二丁、五丁・六丁、第十一丁可～十四丁、第十七丁～二十一丁に相当する版木は確認できない。七枚目の第二十七丁の裏面には、凡例が彫られている。また巻下も揃いではなく、第三丁～十八丁があり、第一丁・二丁、四・五丁の版木は確認できなかった。

『講演法華儀』の版木の寸法は、全体で縦二三・二×横三七・三糎、版木本体で縦二二・九×横三三・四糎である。匡郭があり、内法で縦一九・四×横一五・〇、一丁分で横三一・二糎となっている。一面は十行、一行は二十字である。

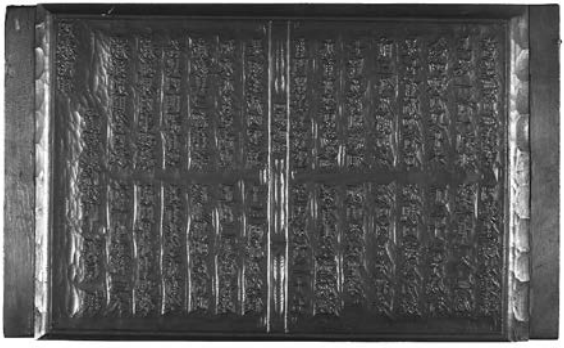
『講演法華儀』の内題は上下巻ともに冒頭の丁の版木がない

ため確認できないが、上巻の尾題に「入真言門住如実見講法華略儀巻上」、下巻の尾題に「入真言門住如実見講演法華略儀巻下」とあり、版心題に「講演法華儀巻上（下）」とある。また凡例題には「新刻講演法華儀凡例」とあり、凡例末には「藕峰釋敬光謹識」とある。通番号で二〇八番、『講演法華儀』の十六枚目の版木は、題箋が彫られ、「講演法華儀／四教略頌／五時略頌／合」とあって、『四教略頌』と『五時略頌』と合冊になっていたことがわかる。後述するように、版木の寸法が『講演法華儀』と『四教略頌』・『五時略頌』とでは若干の違いがある点が気になるが、題箋からは合冊されたものと判断される。題箋の版木は裏面は何も彫られていないが、墨書で、「天台宗大学林支校甲／明治廿四年（一八九一）七月日／幹事瀧本智観／新調」と書かれていた。版木が摩滅するなどして、新調した可能性が考えられる。



〔写真７〕 G『講演法華儀』

Hの『四教略頌』は、内題次行に「首楞厳院沙門　源信　撰」と彫られるように、源信の作で、「初学暗誦要文」の天台入門書として重んじられたものである。一頌が七字、全体で百八十頌にて天台教判化法四教の枢要を示したものである。次の『五時略頌』と共に行い、常には『四教五時略頌』や『教時略頌』といった。最も簡潔に天台教判の要語要義を表し、頌であるために口調がよく、全文を暗誦するにふさわしいものであり、日本天台においては、古来から天台学入門の指南書として重用された。また『西谷名目』はこの略頌を骨格としたものである。



〔写真８〕 H『四教略頌』

『四教略頌』の版木は全部で三枚である。第一丁～第六丁までの揃いで、一枚の版木に表裏一丁ずつが彫られている（写真８）。把手木は版木と同じ長さ、ほぼ同じ厚さの細いものである。

版木の寸法は全体で縦一九・七×横三二・七糎、版木本体は縦一九・七×横二八・九糎、版面は匡郭の内法で、縦一八・〇×横一二・五、一丁分の横寸は二

六・一糎である。一面八行で、七字が二段になっている。

Ｉの『五時略頌』は、同じく源信の撰述で、内題に「五時略頌」、内題下に「首楞厳院沙門　源信撰」と彫られる。内容は、五時教の華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃を、偈頌で説述したものである。これも『四教略頌』と同じく、「天台小部集釈」に所収されている。

『五時略頌』の版木も三枚である。第一丁～第六丁までの揃いで、一枚の版木に表裏一丁ずつが彫られている。把手木は版木と同じ長さ、ほぼ同じ厚さの細いものである。版木の寸法は、全体で縦一九・六×横三二・五糎、版木本体は、縦一九・六×横二八・八糎、版面は匡郭の内法で、縦一八・〇×横一二・五、一丁分の横寸は二六・二糎である。一面は八行で、一行十七行である。先の『四教略頌』と同じ版型となっている。

Ｊの『般若心経夢性解』一巻は、数多くある『般若心経』の註釈書の一つで、龍淵（幻成逸人）の著述である。自序の題に「刻　般若心経夢性解序」とあり、自序の末に「天保癸巳（四年、一八三三）之秋東叡教曩督学高歓叙」とある。また序末に「天保三壬辰（一八三二）冬十二月／寓于武陽五台山幻成逸人謹撰」とある。序の版面に「行般若波羅蜜多図」「幻成逸人自画」とあり、船に乗った弁財天の他に四名の仏の姿、また船外に四名の人物が描かれた図画が彫られる。見返題には「般若心経夢性解」とある。題箋（内法一八・二×二・五糎）には「般若心経夢性解」の題が彫られる。また見返には「般若心経夢性解」の題の他、「書肆　慶元堂」「幻成逸人著」とある。

また末尾に広告があり、以下のように彫られている。

幻成変人著書追刻目次
般若心経夢性解　一巻
八識和解　一巻
四教儀和解　三巻
円頓章　詹詹録　一巻
金錍答鈔　一巻
指要藝通録
文襄初論　三巻
江戸書肆　和泉屋庄次郎梓

『般若心経夢性解』の版木は、全部で十枚を数えた。一枚の版木に表裏一丁ずつが彫られていて（写真9）、版面より長く厚みもある把手木が左右に付いている。一面行数は十行で、一行字数は二十字である。寸法は、全体で縦二四・二×横四四・〇、版木本体の寸法は、縦二二・三×横三九・五糎、匡郭の内法は、縦二〇・一×横一四・五糎、一丁分の横は二〇・二糎であった。第一枚目と二枚目が序、三枚目から九枚目が本文で、第一丁～第十三丁までである。第十三丁の裏面に広告が彫られる。第十枚目が題箋と見返で、その裏面は何も彫られていない面であった。

Ｋの『不動尊秘密陀羅尼経』は、内題に「聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼経」とあり、内題下に「金剛手菩薩説　三蔵般若遮加羅　此云徧智譯」とある。また題箋には「不動尊秘密陀羅尼経」とある。この内容は、金剛手菩薩が妙吉祥菩薩に対して聖無動尊の本誓・所居・相貌・攝化等の功徳や陀羅尼を説いたも

のである。特に「不動火界呪」を最勝根本陀羅尼とし、護身や加護住処などの真言も説いている。不動尊の功徳を余すところなく説いたもので、修験道の行者が三時勤行にこの経を読誦する。

『不動尊秘密陀羅尼経』の版木は、全部で五枚あり、版木の隅に彫られた丁付が一～九まで揃い、九丁の裏面、本文の末尾に刊記が確認できるため、全五枚で揃いと判断される。

七丁目に、「聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼経」と尾題が確認でき、続いて「佛説聖不動経」との内題が確認できる。その尾題「佛説聖不動経」の次には「三十六童子」と見出しがあり、さらに八丁目には「八大童子」との見出しが確認できる。五枚目の裏に刊記があり、「東叡山勧学講院蔵版／御製本所／台宗書林　江戸下谷廣徳寺前通　和泉屋庄次郎」と記され、年記は不明ながら、「勧学講院」の版行と確認できるものである。

〔写真９〕　Ｊ『般若心経夢性解』

〔写真10〕　Ｋ『不動尊秘密陀羅尼経』

版木の寸法は、全体が縦一八・三×横五一・八糎で、版面には天地に界線があり、界高は一三・七～一四・二糎程度、横の長さは、三四・八～三五・二糎程度である（写真10）。左右に版木より長く厚い把手木があり、三枚目の版木の把手木には、「不空我」と墨書があった。一面行数は二十行、一行字数は十七字である。本経は、折本であるようで、四行ずつ、小さく折線の指示が上下に刻されている。

Ｌの『礼法華経儀』『礼弥陀懺義』は、形式が同じで版木も続いているため、合一冊と思われる。版面から折本と思われる。冒頭内題に「礼法華経儀」とある。

「朝題目、夕念仏（宵念仏）」という言葉があるように、天台宗では、朝に法華懺法を行い、

夕方に『阿弥陀経』を誦して念仏を称える、例時作法を行なうことが日常の勤行となっていたが、その折に用いる経本と思われる。

版木は全部で九枚、『礼法華経儀』が三枚と『礼弥陀懺義』が六枚である。一枚の版木に、一面に二十五～二十八行程（一行字数は十四字）が彫られている（写真11）。版面は、天地に界線があり、版木の隅に「ホノ二」～「ホノ六」、「アノ二」～「アノ十二」と丁付が彫られる。ただし「ホノ一」「アノ一」は彫られていない。「ホ」の字は入れ木になっている。

版木の寸法は、版木全体の寸法は、縦一八・一×横五七・八糎、版木本体の寸法は、縦一六・一×横五三・〇糎、左右に版木より長く太い把手木が左右に付いている。版面には天地に界線があり、界高は一三・一糎、天界の横の長さは四二・一～四三・〇糎程である。

九枚目、本文の後の刊記には、「安政五戊午年（一八五八）仲夏／東叡山勧学講院蔵板／御製本所　下谷廣徳寺前　和泉屋庄次郎」とあり、「勧学講院」の出版物とわかる。

〔写真11〕 L『礼法華経儀』

Mの『天台大師和讃』は、天台大師智顗の一生の事業を、天台大師別伝などに依って和讃に仕立てたものである。天台大師を崇敬していた源信が、七五調の二三二句に綴ったもので、天台大師の行った偉業を余さず詠嘆したものである。天台宗では、天台大師の報恩会には必ずこの和讃を奉読する。和讃の歴史の中でも先駆であり、歌謡史上においても重要なものとされる。

版木は全部で五枚確認できる（写真12）。版木には丁付があって版木の順番が知られるが、「一」～「十二」までである中で、第七丁・第八丁に相当する版木一枚が確認できなかった。十二丁目には刊記があり、「東叡山／勧学寮蔵板／御製本所／和泉屋庄次郎」と彫られている。刊年は不明ながら、「東叡山勧学寮」の版行と知られる。

〔写真12〕 M『天台大師和讃』

版木の寸法は、縦一二・〇×横三五・〇糎で、把手木はいず

れの板も付いていない。文字の彫られている部分は、縦一〇・二×横三二・六糎ほどで、一面行数は二十行、一行字数は九字である。折本に仕立てたものと思われる。

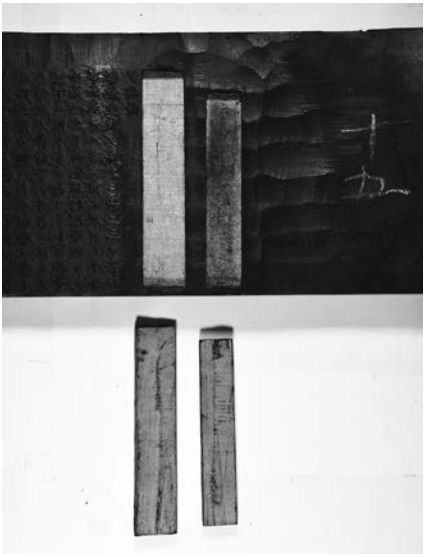
Nは『勤行式』である。内題には「天台円宗遮那止観両業勤行式」と記される。

『勤行式』の版木は八枚あり、丁数は「一」から「十四」まで連続しているため、揃いと思われる。

丁数は版木の右下に彫られている。丁付の「十一」～「十四」は入れ木である。一枚目から七枚目までが本文で、八枚目は表面に題箋、裏面に刊記となっている。五枚目九丁目に「天台円宗止観業勤行式礼讃文」が付され、六枚目十二丁目に「仏頂尊勝陀羅尼」、七枚目十三丁目に「附言」が付される。「仏頂尊勝陀羅尼」は本文が梵字でルビが振られる。八枚目の表は題箋で、題箋には大小の二枚があり、大きい方に「勤行儀」、小さい方に「勤行儀　完」とある。また八枚目の裏は刊記が二点あり、刊記①には「是時明治十四年十二月／録司兼校長一乗菩薩沙弥信如」とあり、刊記②には「第二号中学林蔵版」とある。明治になっても、木版にて『勤行式』が彫られていたのである。

版木の寸法は縦が一六・一～一六・五糎、横が五六・〇～五六・五糎程度である（写真13）。左右に版木より長く厚い把手木があり、墨書で「七　八」など、丁数が記されている。本体の版木は、縦一四・九×横五一・五糎で、上下に天界・地界があり、界高は一三・一糎、横の長さは四一・一糎程度である。六枚目の版木、十一丁の三行目に入れ木があり、「所生罪福亦皆空／猶如ヶ眠夢亦ヶ仮有」「無明罪福性雖空／無明体性是レ無識」とある（写真14）。一面行数は二十五行で、一行字数は十

〔写真13〕　N『天台円宗遮止両業勤行式』



〔写真14〕　N『勤行式』入れ木

五字である。

「附言」は、以下のように記され、近年の読経が早すぎることを嘆いている。

一、吾宗ノ読経ハ近来兎角口チ早ニ読ヲ得タリト思ヘリ。頗ル聴衆ノ信ヲ亡フテ冥慮ノ程真ニ怖レアリ。字句緩然寥亮トシテ左顧右眄スル勿レ。或ハ啖咳スルナゾ甚聞キ苦ク見苦シ。別シテ化儀ノ法式ナゾニハ無論ノコトニシテ声明ナゾニハ甚以空シカラズ　（以下略）

Oの『晨昏課誦』も、『勤行儀』と同様、日常の勤行用の経本である。「晨」は早朝、「昏」は夕方のことで、朝夕に唱える課誦ということである。

版木には丁付が彫られていないが、版面の未刻部分に「一」～「十六」と墨書があり、版木の順番が知られる。版木は全部で九枚で、八枚目までは表裏に本文が記され、九枚目は表面に本文の続きと題箋が彫られる。題箋には「晨昏課誦」とある。九枚目の裏面は彫られておらず、刊記はない。

版木の寸法は、縦一六・七×横六五・一～六五・八程度である（写真15）。一面は、四行ずつ、六つのブロックで二四行が記され、折本仕立てのものと知られる。一行字数は十五字である。版木より厚く長い把手木が左右に付されている。版木本体は、縦一五・〇×横六〇・七糎である。匡郭はなく、文字高は一二・〇糎程度、四行分で横六・三糎程度、四行ごとに一・八糎程度をあけて、六ブロックを並べ、一面の文字の横幅は四八・三糎となっている。

〔写真15〕　O『晨昏課誦』

『晨昏課誦』は木箱に入っている（写真16）。木箱の外寸は、縦七一・八×横二一・四×高さ二九・三糎である。その木箱の脇には墨書で「天台大学寄託　廿四ノ内十八」と記されていて、この箱が、全部で二十四箱ある内の十八番目という意味であり、全体で二十四箱あったことが知られる。

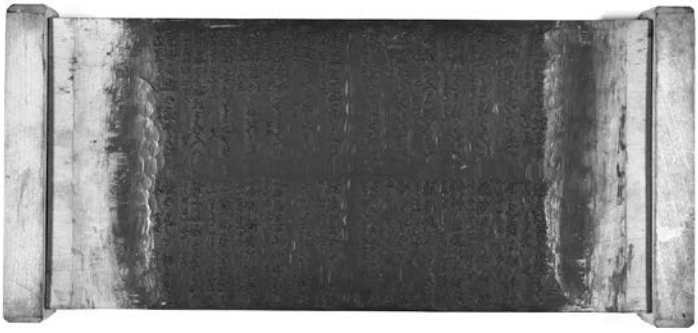
Pの『因果経和讃・善悪種蒔鏡』は、『因果経』という釈迦の伝記の一種で、因果応報による仏の出現を説く内容を、和讃にしたものである。「善悪種蒔鏡和讃」を付した版本は、京都大学所蔵本がデジタル公開されている「日蔵／未完／13」の写真を見ると、内容は同じではないことがわかる。また『国書総目録』には『因果経和讃』の所蔵に、蓬左文庫、名古屋市立博物館、東洋大学哲学堂蔵本などが記されるが、内容はいずれも一致しないようである。

ちなみに「和讃」とは、仏教歌謡の一種で、仏・菩薩の教えやその功徳、あるいは高僧の行績をほめたたえる讃歌とされる。梵語による梵讃、漢語による漢讃に対し、日本語で詠われるためにこの「和讃」の名がある。和讃は、調子が良く、法会の中で声明の旋律に乗せて諷誦したのが人々の共感を得て広まったとされる。本書は、『因果経和讃』に『善悪種蒔鏡和讃』を付したものである。

〔写真16〕 版木木箱

大正大学蔵本は、巻末に「天照皇太神宮、八幡大菩薩、春日大明神、日吉聖真子、熊野権現、善光寺如来、聖徳太子、伝教大師、弘法大師、北野天神、源信和尚、空也上人、和泉式部、西行法師、慈鎮和尚、法然上人、親鸞上人、熊谷蓮生法師、蓮如上人、無能和尚」の詠歌二十首が収録される。また末尾に、「沙門『良海』蔵板」とあるが、『良海』の部分は入れ木の補刻である。刊記はなく、刊年は未詳である。

本文は上下二段に行書体で記され、振仮名が付される（写真17）。版木の右下にはそれぞれ「一」～「二十二」と丁数が彫られる。ただし、第七丁・八丁と、第十一丁・十二丁に相当する版木は確認できない。版木は全部で十枚で、本文が九枚と、「題箋」と「刊記」が彫られた板が一枚となっている。四周双辺の題箋には「因果経和讃　善悪種蒔鏡　全」とある。



〔写真17〕 P『因果経和讃』

版木の寸法は、版木全体で縦一八・二一×横三八・〇糎、版木本体は縦一六・三×横三三・四糎で、版木より長く厚い把手木が左右に付されている。匡郭はなく、文字の部分で縦一五・〇×横（半面）一〇・四、版心が一・〇糎ほどあり、一面の横は二一・七糎程である。一面行数は七行である。

Qの『仏隴百絶』は、仏隴の漢詩集である。題箋に「仏隴百絶　完」とあり、見返に「仏隴道人著／仏隴百絶／破有菴蔵」とある。また内題に「仏隴百絶」とあり、内

〔写真18〕 Q『仏隴百絶』

題下に「忍岡　釈霊如仏隴著」とある。

版木は十枚あり、一枚目は表が序、裏に序二、二枚目から九枚目までの八枚が本文で、一面に一丁ずつ一枚に二丁、一丁～十五丁まであり、九枚目十五丁の裏面は彫られていない。十枚目は表面に見返と題箋、裏面に跋文（界線あり）が彫られている（写真18）。本文の一面行数は十行で、一行字数は二〇字である。匡郭は単郭と双辺との混合である。

版木の寸法は、全体で縦十八・九×横三十九・六糎。版木より長く厚い把手木が左右に付いていて、版木本体は縦一五・六×横三五・〇糎である。匡郭の内法は、縦一五・三×横一〇・八糎、版心の幅が〇・九糎、一丁の横は二二・七糎である。界線があり、界幅は一・〇糎である。

Rの『梵漢対訳字類編』は、行智の著した悉曇の字類集である。内題に「梵唐対訳字類編」とあり、内題下に「江戸悉曇沙門行智集」とある。行智（一七七八～一八四一）は江戸時代後期の修験者で、字は慧日、阿光坊と号した。江戸浅草福井町の銀杏八幡宮別当覚吽院に住み、祖父行春と父の行弁について仏教や諸学を学んだ。特に著名なのは悉曇学で、平田篤胤も行智に学んでいる。他にも冷泉流の歌道を修め、持明院基時に書道を習うなど、博識多芸であった。父の後を継いで覚吽院の住持となり、やがて当山派の総学頭、法印大僧都に任ぜられて当山派修験で重要な役割を果たした。修験や悉曇に関する数多くの著作を残し、中でも『木葉衣』や『踏雲録事』は、修験道の来歴や故事伝承をつづったものとして著名である。

『梵漢対訳字類編』の版木は全部で八枚あるが、一面に三丁、表裏で六丁が彫られている（写真19）。丁付を見ていくと、必ずしも順番に並んでいる訳ではない。一枚目は、表裏とも凡例である。表面に凡例の一丁から三丁、裏面に凡例の四丁から六丁が彫られる。二枚目も凡例で、表面に凡例の第七・八・九丁、裏面に凡例の十・十一・十二丁となっている。凡例は全部で十二丁ある。三枚目は、表に序が一丁、本文の第一丁と第二丁、裏面は本文の第八・九・十丁である。四枚目は本文の続きで、表面が本文の第二・三・四丁、裏面が第五・六・七丁である。五枚目は、表面に本文の第十一・十二・十三丁、裏面に本文の第十四・十五・十六丁となっている。六枚目には、表面に本文の第十七・十八・十九丁、裏面には第二十三・二十四・二十五丁と離れた丁が彫られ、七枚目に、表面に第二十・二十一・二

十二丁、裏面に二十六・二十七・二十八丁というように、必ずしも丁数は続き番号になっている訳ではない。

八枚目は、表面が題箋と見返（または扉か）、跋文となっている。題箋には「梵漢対訳字類編　全」とあり、見返には「天保甲午（天保五年、一八三四）新鐫／梵漢対訳字類編」とある。また跋末に「天保甲午陽月□□日苾蒭無覚識　沙門行阿書」とある。裏面には、見返に「円明院行知阿闍梨編集／梵漢対訳字類編／如々菴蔵版」とあり、刊記には「天保六年乙未（一八三五）正月発行／書肆青藜閣　江戸浅草茅町二丁目　須原屋伊八」とある。

〔写真19〕　R『梵漢対訳字類編』

版木の寸法は、全体で縦一八・〇×横六二・五糎、版木より長く厚い把手木が左右に付く。版木本体の寸法は、縦一六・二×横五七・七糎。匡郭があり、匡郭内法は、縦一四・二×横五・二糎、版心の幅は一・〇糎、一丁の横幅は一〇・四糎と小型の本である。版心題には「対訳字類編」とあり、見出しの梵字が記される。一面行数は七行、一行字数は十五字である。

Sの『霊峰宗論』は、藕益智旭が晩年に、杭州西湖の霊峰において門人成時がその説を集めて『霊峰宗論』として編じたものである。日本では、享保八年、寛政七年、安政四年、明治四十年と度々版行された。全十冊と大部なものであるが、大正大学蔵本は版木が三枚のみ存している状態である。

藕益智旭（一五九九～一六五五）は中国明末の僧である。雲棲袾宏、真可、憨山徳清などといった明末大家の流れを汲み、律や禅と天台教学を中心に学ぶが、後に浄土教によって融合的仏教を論理的に発展させた。儒仏の調和にも独創的な見解を持ち、日本の江戸の仏教に大きな影響を与えている。八不道人、始日大師とも呼ばれ、憨山、雲棲、達観とあわせて、明代の四高僧に数える。憨山の禅、雲棲の浄土教をうけて、主として天台と律によって仏教の総合再編につとめた。禅教離反や各宗の偏向を排し、『大蔵経』の要義をあつめて『閲蔵知津』を作って、大蔵経の分類を一新した人物である。

三枚の版木は、一枚目の表面が「巻三之二」の第十八丁、裏面が「巻七之二」の第十八丁、二枚目は、表面が「巻三之二」の第十七丁、裏面が「巻七之二」の第十九丁、三枚目の表面が「巻九之四」の第二十一丁となっていて、他の大多数の版木は確認できない。三枚目の裏面は、見返と題箋で、見返には「全部十冊／藕益大師宗論／東叡山蔵版」とある。

版木の寸法は、全体で縦二三・九×横四三・二糎、版木より長く厚い把手木が左右にある。版面本体は縦二二・一×横三

九・一糎で、匡郭があり、匡郭内法で縦二〇・〇×横一四・二糎、一面の横は二九・八糎である。また界線があり、界幅は一・四糎である。また一面行数は十行、一行字数は二十字である。

Tの『法語承習』は、端本で、版木一枚のみであるが、堯款の『恵心僧都念仏法語承習註』と思われる。『国書総目録』では、慶応二年（一八六六）の版本が知られる。片側に一面、裏表で二面が彫られている。この版木は、表面に第十三丁、裏面に第十四丁があり、版心題に「法語承習」とある。版木の上部と両脇に「恵心法語」、下部に「十三　十三　恵心法語」と墨書がある。

寸法は、版木全体で、縦二〇・〇×横四〇・八糎、版木より長く厚い把手木が左右に付く。版木本体は縦一八・三×横三六・四糎で、匡郭の内法は、縦一七・二×横一二・一糎、一丁分で横二五・五糎である。界線があり、界幅は一・一糎である。一面行数は十行、一行字数は二十字である。

その他、種類の異なる五枚の版木がある。一枚ずつ見ていくと、U1は、表面に刊記が二つ彫られ、裏面は未刻の刊記のみの一枚である。匡郭のある一丁分で、右の刊記一には「明治十九年出版／出版人天台宗大学林支校／幹事権大僧都波母山円潤／東京府下本郷区駒込千駄木町」とあり、左の刊記二には「同寮長大僧都　光栄純映／発売人　台宗書林和泉屋庄次郎」とある。書目は未詳ながら、「天台宗大学林」の版行と知られる一枚である。

版木の寸法は、縦二二・五×横四一・二糎で、版木と同じ程度の厚さで長さもほぼ同じ把手木が左右に付されている。版木本体の寸法は縦二二・二×横三七・四糎である。匡郭があり、匡郭の内法は縦一九・五×横一三・六糎、版心の幅が一・三糎で、一丁分の横幅は二八・九糎である。

U2は卒業証書のひな形である。寸法は縦一七・五×横二七・八糎で、版木と同じ厚さの把手木が左右に付される。上部に縦一・八×横二四・〇糎の板を足して版面を彫っている。

試学制式第　級
卒業候事
明治　年　月　日
中学林

表面には、右のように彫られていて、明治の中学林の卒業証書とわかる。裏面は彫られていない。

U3は賞状のひな形である。寸法は縦二二・三横二八・九糎で、裏面は未刻である。版面には以下の文字が彫られる。

賞状
古本学年中
ニ附キ之ヲ賞ス
大正　年　月　日
私立天台宗学

大正期の天台宗学校で用いられた賞状の版木である。

U4は題未詳の一枚である（写真20）。版木の右下に丁付が彫られていて、表面が「下ノ三」、裏面が「下ノ四」とある。版木の寸法は縦一四・四×横三六・八糎で、左右に把手木が付く。版木本体は縦一三・七×横三三・四糎である。漢字片仮名交じりの和文で記され、一面十行、一行字数は十四～十六字程

度である。また五行ずつに分けて記される。表面の途中には「第二段」、裏面の途中には「第三段」と見える。書名は未詳である。彫られている本文を以下に示す。

所越後国（国府）此外門徒死罪流罪
皆略之皇帝（諱守成号佐渡院）聖代建暦辛
未歳子月中旬第七日。岡崎中納言
範光卿ヲモテ。勅免。此時聖人。右ノ
コトク禿字ヲ書テ。奏聞シ給ニ。陛
下叡感ヲクダシ侍臣オホキニ褒美
ス。勅免アリトイヘドモ。カシコニ化
ヲホドコサンガナメニ。ナヲシバラク
在国シタマヒケリ。
第二段　（以上表面）

聖人越後国ヨリ。常陸国ニ越テ。笠間
郡稲田郷トイフトコロニ隠居シタマ
フ。幽栖ヲ占トイヘドモ。道俗跡ヲタヅ
ネ。蓬戸ヲ閉トイヘドモ。貴賤衢ニ溢。
仏法弘通ノ本懐コヽニ成就シ。衆生
利益ノ宿念タチマチニ満足ス。コノ
時聖人。オホセラレテノタマハク。救世
菩薩ノ告命ヲウケシイニシヘノユメ。
スデニイマト符号セリト。
第三段　（以上裏面）

U5も題未詳の一枚である。丁付はなく、本文が記される。本文は以下の通りである。

一、喜捨する人は財の多少をとわす、その名をしるして講堂に永く納め、更に又前に石碑を立て、有信の人その人の分は申に及はす、百人以上の財を出し、或は此帳壱冊以上を受取、他の人を勧めなはことさらに其姓名を記し、百人以下は束て其国処の名をしるし、末の代までなかく朽さらしめん者なり。
（以上表面）

〔写真20〕　U題未詳版木

不朽物となし、其息金を以て年月に繕なさは、学徒ます〳〵さかんに正法永く伝りなん。しかあらは施す人の姓名を記し仏前に永く納め、現世安穏後生善処の回向せし□日ことに誦する法華妙典吉祥天女経は、其人丶（と）の修福となり、投そつ所

はつかにして報ゆる功徳、須弥滄海にまさりなん。しかあらは各〳〵力のたゆる所にまかせ、某等か所願を扶助し給ひなは、はかりなき福田、あに疑ひあらん哉。

（以上裏面）

裏面に刊記があり、「天保六未年（一八三五）三月／伴頭／浄詮房　高歓／真浄房　賢廣／教運房　亮天」とある。

版木の寸法は、縦二五・八×横四五・六糎で、把手木は片側が付いていて、片側が取れている状態である。

以上、A～Tまでの二〇種類の経典類、二九二枚の版木と、五枚のバラの版木について、具体的にその内容と版木の情報を記してきた。

版木には、一枚の版木に、片側一面（一丁）、裏表で二面（二丁）のもの、片側二面（二丁）、裏表で四面（四丁）のもの、片側三面（三丁）、裏表で六面（六丁）のものがあった。またその寸法は大小区々であった。

また現存状態についても、経典ごとに見ていくと、揃っているもの、若干欠けているもの、わずかにしか残っていないものなど様々であり、また虫損や痛みの状態など、版木による差も見受けられた。

三、勧学講院と版行

東叡山寛永寺勧学講院では、この版木が示すように、勧学講院による出版がなされていたのであるが、刊記を見ると、「和泉屋庄次郎」「慶元堂」「須原屋伊八」などの名が見える。

〈表二〉　版木の刊記に見られる書肆名

経名	和暦	西暦	書肆名
E六妙法門	文化八	一八一一	東叡山勧学校蔵板／東都書林浅草新寺町　和泉屋庄治郎本石町十軒店英平吉謹行
F請観音経疏	文化十四	一八一七	東叡山勧学講院蔵板／東都書林　東叡山池之端須原屋伊八／浅草新寺町和泉屋庄次郎
R梵漢対訳字類編	天保六	一八三五	書肆　青藜閣　江戸浅草茅町二丁目　須原屋伊八
C金剛錍巾免解	安政二	一八五五	東叡山勧学校院蔵版／台宗書林／江戸下谷廣徳時前　和泉屋庄次郎
L礼法華経儀・礼弥陀懺義	安政五	一八五八	東叡山勧学講院蔵板／御製本所　下谷廣徳寺前　和泉屋庄次郎
A観音玄義記講義	万延二	一八六一	東叡山勧学講院蔵版／台宗書林／江戸下谷廣徳寺前和泉屋庄次郎
D維摩詰経三観玄義	天明八	一七八八	東叡山勧学校蔵／浅草新寺町台宗書林和泉屋庄次郎
M天台大師和讃	未詳	未詳	東叡山勧学寮蔵板／御製本所和泉屋庄次郎

J般若心経夢性解	未詳	未詳	江戸書肆　和泉屋庄次郎梓／書肆　慶元堂
K不動尊秘密陀羅尼経	未詳	未詳	東叡山勧学講院蔵版／台宗書林江戸下谷廣徳寺前通　和泉屋庄次郎
U1未詳	明治十九	一八八六	出版人天台宗大学林支校／発売人　台宗書林和泉屋庄次郎
B十不二門指要鈔会本	明治十七	一八八八	天台宗大学林支那蔵版

多くに共通しているのが、東叡山勧学講院の版を和泉屋庄次郎が請け負っているというものである。また、Jの『般若心経夢性解』に見える「慶元堂」は、和泉屋庄次郎のことである。慶元堂は、江戸浅草にあった書籍販売と出版を行った書肆である。初代和泉屋庄次郎は松沢老泉（一七六九～一八二二）のことで、老泉は自らも典籍を研究し、『彙刻書目外集』や『経籍答問』などを著した[7]。

松沢老泉は、幼時に父を亡くし、十七歳で書物問屋を志して、一代で大店となった。同業の世話に努め、行事も数回勤めた。記憶が抜群で学者名士と親しくし、吉田篁墩に師事して書誌に通じ、貴重な書籍を掘り起こして江戸の有名な学者たちに提供したという。初代の時、蔵版は寛永寺と昌平校官板の二大拠点を支配し、その利益は大きかったとされる。

文政五年（一八二二）に老泉が亡くなると、億太郎（後、万之助）が相続した。億太郎は放蕩息子で商売に身が入らず、和泉屋は零落した。天保五年に妻を失うと、それを理由に家督を息子の久太郎に譲った。久太郎は誠実勤勉な性格で、浄名院の慧澄に信頼され、寛永寺にかかる版行を一手に任されるようになった。それらの版は五十数点あり、大いに売れて商売は順調に展開した。寛永寺の門徒総代の一人に任ぜられると、五戒庵と称して家督を長男の仁三郎に譲っている。

版木の出版年と比較すると、EFは初代庄次郎の折のもので、その他は三代目・四代目のことと思われる。『松沢老泉資料集』所収『慶元堂書記』の記録を見ると、寛永寺版を請け負っている記録や、官版の「摺立売捌仕法」、「例示懺法板木金維持学寮買上の件」など、寛永寺勧学院版に関係しそうな資料が散見される。

F『請観音経疏』とR『梵漢対訳字類編』の「須原屋伊八」は、初代伊八は、安永二年（一七七三）生、天保五年（一八三四）六月没。屋号が須原屋・青藜閣・慶元堂・文淵堂である。江戸の書肆で、代々伊八を称した。天保元年（一八三〇）、初代伊八の時に、下谷池之端の店が火災で焼け、浅草茅町に移転しているが、F・Rの刊記の記載と合致する。

次に、少し細かなことになるが、勧学講院の名称について、若干検討しておきたい。版木の刊記や見返の部分に注目し、寛永寺勧学講院の名称を示す箇所を確認し、年代別に並べると以下のようになる。

〈表三〉 版木の刊記等に見られる勧学講院の名称

和暦	西暦	呼称
天明八年	一七八八	東叡山勧学校（D『維摩詰経三観玄義』刊記）
文化八年	一八一一	東叡山勧学校（E『六妙法門』見返・序・刊記）
文化十四年	一八一七	東叡山勧学講院（F『請観音経疏』刊記）
安政二年	一八五五	東叡山勧学校院（C『金剛錍巾免解』刊記）
安政五年	一八五八	東叡山勧学講院（L『礼法華経儀・礼弥陀懺義』刊記）
万延二年	一八六一	東叡山勧学講院（A『観音玄義記講義』刊記）
明治十七年	一八八四	天台宗大学林（B『十不二門指要鈔会本』跋・刊記）
明治十九年	一八八六	天台宗大学林支校（T『法語承習』刊記）
明治二十四年	一八九一	七月日、天台宗大学林支校（G『講演法華儀』版木裏墨書）

この他、刊行年次が未詳ながら、M『天台大師和讃』の刊記に「東叡山勧学寮」の名が見え、K『不動尊秘密陀羅尼経』の刊記には「東叡山勧学講院」の名が見える。これらの版木からうかがえるのは、文化八年（一八一一）以前が「東叡山勧学校」、文化十四年（一八一七）以降が「東叡山勧学講院（校院）」、明治に入ると「天台宗大学林」となっている。

「勧学講院」と「勧学寮」「勧学院」などの名称の違いについては、おおよそ「勧学寮」が早い例で「勧学講院」が後の名称と言われたりもするが、了翁の事蹟を追うと、了翁の時代にすでに「勧学寮」も「勧学講院」も併用していることが確認できる。

了翁の弟子の編集である了翁の自伝『行業記』では、寛永寺に「勧学寮局」を建立すると記す。『行業記』を確認していくと、東叡山の勧学講院の建立に関する記事では、「勧学院」「勧学寮」「勧学寮局」を厳密に区別することなく使用しているようである。また貞享三年（一六八六）の年記をもつ了翁の一切経寄進の発願を記した朱刷では、「貞享三年歳旅丙寅（中略）東叡山勧学講院開祖」と自称している。

つまり勧学寮を創建した了翁は、「勧学寮」「勧学院」「勧学講院」を併用しているのであった。この呼称の問題は、今後の課題としたい。

四、了翁祖休と寛永寺勧学講院

ここまで現在大正大学附属図書館が所蔵する東叡山寛永寺勧学講院旧蔵の版木について述べてきたが、最後に、東叡山寛永寺勧学講院の創設のことについて確認しておきたい。寛永寺勧学講院は、了翁祖休によって創設されたものである。

勧学講院を建てた了翁祖休（道覚、一六三〇～一七〇七）は、その生涯にわたり弘経と社会事業を行った僧侶で、近世仏教において、注目すべき僧である。「弘経」という点では、同じ寛永七年（一六三〇）に肥後国に生まれた鉄眼道光が鉄眼版一切経を刊行するが、了翁は、経典の寄進と、寛永寺と瑞聖寺には僧侶の学問施設としての勧学講院を建てて講経を行うという、

同じ「弘経」でも異なる活動をした僧である。ここに改めて、了翁を紹介しておこう。

了翁の伝記を知るための一次資料には次の四つの基本資料がある。

①黄檗天真院了翁覚禅師紀年録』（版本二種、元禄十四年序／宝永四年跋、仁峰元善編）

②『仏国了翁禅師開堂語録』（元禄十五年序、仁峰元善編）

③『収納一代宝典並儒老和漢群書武州諸国二十一庫本末縁起』（→（略称）『〈勧学講院開祖〉了翁祖休禅師行業記』、『行業記』、了源・了観編）[8]

④『了翁碑記註』（文化八年刊、高泉性激記碑文、文思淵註）

この中で詳しい記述を持つものは、②の『紀年録』と③の『行業記』である。②の『紀年録』は漢文体で、諸本によって所際する了翁の年代が異なる。

②『黄檗天真院了翁覚禅師紀年録』（版本三種）

㋐元禄一三年（一七〇〇）黄檗第六代千呆性佼序。雪村の序は無し。

（内容）寛永七年（一六三〇）～元禄一二年（一六九九）の記事。→了翁七十歳まで。

㋑元禄一三年（一七〇〇）黄檗第六代千呆性佼序、元禄一四年九月雪村道香の序。

（内容）寛永七年（一六三〇）～元禄一二年（一六九九）の記事。→了翁七十歳まで。

㋒、㋑の二つの序に加えて、宝永四年黄檗第七代悦山道宗の跋文を持つもの。

（内容）寛永七年（一六三〇）～宝永四年（一七〇七）の記事。→了翁七十八歳まで。

③の『行業記』は、漢字片仮名交じりの和文で記されたものである。正式な題名は『収納一代宝典並儒老和漢群書武州諸国二十一庫本末縁起』で、『〈勧学講院開祖〉了翁祖休禅師行業記』と通称する。弟子の了源・了観編で、伝本は五種が知られる。弟子の編であるが、内容は「某乙」つまり私を主人公とした、自伝的体裁を取る。寛永七年（一六三〇）～貞享二年（一六八五）の記事で、了翁五十六歳までの伝記である。

この③の『行業記』を中心に、②の『紀年録』で補いながら、了翁の伝記を紹介し、寛永寺に勧学講院が建てられる経緯をたどっておくこととする。[9]

（1）了翁の幼少期と修行

まず了翁の幼少年期であるが、了翁は、寛永七年（一六三〇）に、秋田県雄勝郡八幡村（現在の湯沢市）に生まれた。二歳の時に実母が亡くなると、高屋敷村に養子に出されるが、預けられた先の養父母・義姉が続いて相次いで亡くなった。七歳の時には伯父の家に預けられるが、今度はこの伯父伯母が亡くなる。八歳の時に実家に戻るが、このように了翁を預かった者が次々に亡くなるために、「世上無類の悪児」と疎まれてしまい、

引き取り手がおらず、一旦、真言家に預けられた。了翁十二歳の時には改めて親族が評議して、曹洞宗龍泉寺に寺僕として預けられた。お寺では当初、出家を嫌がった了翁であるが、斉藤自得のはからいで、出家することとなる。

次に青年期の修業時代である。寛永二十年（一六四三）十四歳の時、平泉の光堂を訪れた了翁は、秀衡の一切経が散逸してしまっていることを知って嘆き、自ら収集し直して納めることを発願する。すぐに六巻を探し得て本堂に返し納めるが、さらに「一世の際に、一代蔵経を聚集せん」と誓願を起こした。それ以降、この誓願を果たそうと厳しい修行を行う。

十五歳の時には、地元の鎮守八幡に詣で、納経弘願の成就を懇願して杉苗五百八十本を植える。十八歳の時には、米沢亀岡文殊大聖堂に参籠して、納経成就を祈願する。二十歳の時には、上州白井双林寺にて五体投地をし、一夜に三千五百礼をつとめるなど、修行に励んだ。その間、江戸に出た折には、托鉢や米搗きなどをして、ようやく蓄えた金三両を父の助けとした。

一生懸命に祈願をするが、その効験はなかなか現れない。そこでますます厳しい修行を行った。三十三歳の時、病気の療養のために有馬で湯治をしていたのだが、その折、「煩悩の根源は淫欲にあり」と一念発起して、自ら断根した。また三十四歳、摂津勝尾山円通閣にて、燃指の行を行った。つまり左手の小指をたたき砕き、燈火にくべて焼却したのである。その他、清水寺、長谷寺、多賀明神、伊勢大神宮などに参拝し、ひたすらに納経成就を祈願した。

その後、転機が訪れる。三十五歳の時、大願成就のために、洛中洛外、関東、奥州までも奔走するが、全く心願成就の気配もない上に、断指の傷が化膿して苦しんだ。江戸松平庄九郎の家で静養している時、明の高僧で長崎興福寺に来ていた黙子如定が夢に現れ、薬の処方を教えてくれた。夢から覚めて、教えてもらった通りに薬を作って試みると、痛みはすっかり消えてなくなった。

また次に、今度は、断根の傷が痛み苦しむようになった。すると再び夢に黙子如定が現れ、「嘆くことなかれ」と励ました上に、以前教えた薬に一味を加えることを教えた。その薬を処方すると、夢の覚めるように痛みも傷もなくなった。試しに飲んでみると気力が倍増した。自分だけではもったいないと、他人に与えてみると、十人が十人とも皆、元気になったのである。

こうして身体も快復し、万能薬を手に入れた了翁は、次の行動に移る。了翁は、万人を元気にする薬であるから、天下の都会である江戸で売ろうと思いつくのである。薬の名前を、「万能丸」と「錦袋円」とで決めかねたため、浅草寺の観音におうかがいを立てた。浅草寺で通夜をして、「万能丸」と「錦袋円」と書いて拝んではくじをひく。この占いを百回行ったが、いずれも「錦袋円」と告げたため、了翁はこの薬を「錦袋円」と名付けて売り出した。僧侶は商売ができないので、親族に販売をさせた。その薬屋は「勧学屋」と名づけられ、上野不忍池のほとりに建てられた。この薬の効験は、次第に江戸中の評判となり、薬を大いに売り上げて、了翁は金三千両を得ることとなった。この三百両で、林孝宿刊行の一切経（天海版）を購入し、寛永寺に寄進することとした。

(2) 寛永寺への一切経寄進

四十一歳の了翁は、日光輪王寺の宮のはからいによって、東叡山寛永寺に経蔵建立の許可を得ることができた。そこで不忍池の中に土砂で地形を固め、大小の小石で十五間四方の石垣を築き、高低二段の壇を分け、小堂を築いて蔵経を安置した。さらに、「録外ノ仏典・和漢ヲ相兼ネ、儒門老荘百家経史子集、古今ノ群書、医道ノ諸策、本朝ノ書ニ於テハ、上古ヨリ近代ニ至ルマデ、神書歌書記録、此等ノ萬巻」を集め、別々に文庫を修造してこれを収め置き、傍らに勧学寮を建立することを目指したのである。

翌十一年、四十二歳の時には、不忍池、湖中の新築の壇に経蔵堂を建立した。経蔵堂は、横三間・縦五間、二階作りという。経蔵堂の中には輪蔵を設け、左右に書架各四架を設け、棚は各四重にした。さらに縦二間・横三間、二階作で、四方に各四重の書棚を設けた文庫も建てた。これら三棟は、すべて火難を避けるために屋上は銅で包み、如定禅師が中国径山寺から将来した三聖人の銅像を堂中に安置した。

十二年、四十三歳の時には、湖中の築地にさらに文庫四棟を建てた。南北の二棟は二間・五間で、西の二棟は二間・三間の広さである。この新造の四棟は不慮の事故で崩壊するが、以前の二棟は倒壊をまぬがれた。

延宝元年（一六七三）、四十四歳になると、寛永寺に勧学寮を建立する願を立てた。また、寛永寺にとどまらず、大蔵経を閲覧する希望者への便宜のために、さらに他にも二庫、こうした施設の建設と大蔵経寄進を発願するのである。しかしこれがなかなか進展しないまま年月が過ぎてしまう。寛永寺が進まない間に、延宝二年（一六七四）、江戸白銀台の紫雲山瑞聖寺への寄進が進む。一切経の寄進を喜んだ鉄牛道機に許可を得て一切経寄進のための経蔵（文庫）を建て、文庫の東に五局の畳敷の勧学寮を、「披覧学者」のために建てた。延宝八年に、稲葉正則に依頼して購入した明版一切経が届き、瑞聖寺に寄進した。

この年、大相国徳川家綱の死去により寛永寺に御廟を修営することとなった。この機に、大久保忠朝を通じて寛永寺内に勧学寮を建てるための土地を得る申請をするが、これもまたなかなか上手く進まない。三年が経ち、天和二年（一六八二）五十三歳になってようやく土地の許可が得られ、勧学寮局（勧学講院）を建立することができた。なおこの十二月、池之端の勧学屋（薬屋）が類火によって焼失し、これまで蒐集した土蔵の書物一万四千余巻が一度に失われてしまった。寄進の成就は遠のくが、この大火の後、被災者の救済に奔走した結果、かえってこの活動が良い影響を与えて拝領地の営事が進むようになり、天和三年、五十四歳で、ようやく勧学寮局の造営が成就し、経蔵一宇の修築も終えることができた。経蔵は、火事の経験から、屋根や柱を銅板でくるんで、今後の火事に備えた。

貞享元年（一六八四）五十五歳の時、五間に八間の勧学院を整備し、客院や住居とした。建物の整備はほぼ完成する。官工大仏師康乗が、一尺五寸の釈迦尊像を刻み、勧学院の本尊として安置した。勧学院での学問の態勢を整えるため、具体的には毎日絶えず講義が行われるようにするため、学頭陵雲院が『般若心経』を講説したほか、常陸国観音寺を講師に招き、『天台

指要抄』などを講説させた。こうして勧学寮には学徒二百五十余名、遠近の老少が相集って六百余人が集まる盛況を見せるようになったのである。

(3) 一切経寄進事業の拡大

了翁は、天台宗の寛永寺に天海版一切経を寄進し、経蔵と勧学寮を建てて学問の興隆を図った。また禅宗の白銀台紫雲山瑞聖寺に明版一切経を寄進し、同じく経蔵と勧学寮を建てた。台密禅三学兼修の了翁は、三蔵の寄進という大願を持っていたが、そのうち二蔵の寄進を終えたところで、二蔵は江戸に置いたので、残りの一蔵は畿内畿外の辺りに置きたいと考え、高野山に贈ることを計画した。

覚法法親王の建てた高野山光台院を紹介されて、仁和寺の許可を得て、貞享二年（一六八五）に、光台院への寄進を実行した。光台院は、高野山別格本山で、高野御室とも呼ばれる。白河天皇第四皇子高野御室覚法法親王の開基で、以来、覚性法親王、守覚法親王、道助法親王、道深法親王、静覚法親王などが棲禅した。本尊は、快慶作の阿弥陀如来像及び脇侍立像である。

光台院への寄進の折は、折しも鉄眼版一切経が開板されたため、鉄眼版を購入して寄進した。高瀬舟に載せて運んだとのことである。光台院の経蔵は了翁の建てたものから建て替えられているが、了翁の棟札は今に遺されている。また光台院に寄進した鉄眼版には、了翁の寄進への思いを綴った文章が、各冊の末尾（または冒頭）に刷られている。朱刷の文面は以下の通りである。（原文は漢文。書き下し文を記す。）

予は早に俗を出で、貧にして衣盆すら無く、毎に傭作して親に供す。備さに百苦を嘗め、身有るを知らず。惟だ法を弘め、以て恩に報いんことを思う。寛文年中の因有り。蔵典及び和漢百家の書を蒐むること、無慮五萬餘巻なり。離ちて三蔵と為し、各おの台・密・禅の三道場に置き、以て諸方の遊学者の覧に備えり。予、此の蔵を置いて、素志に酬ゆと雖も、尚お周ねからざるを恐る。今、将に更に一十八蔵を置き、前の三者と通じて二十一蔵と為し、遍く三宗に施さんとす。則ち一宗に七蔵有りて、天下の緇侶は、皆は習学して尽くること無かるべきのみ。唯だ冀くは、十方常住の三宝、一切の天龍八部は、大威力を以て、恒に加護を垂れ、某をして衆願圓成し、永く魔擾無からしめんことを。

更に聖天子の萬年、大将軍の萬福、雨暘　時に若い、億兆安寧ならんことを期えり。

時に、貞享三年歳旅丙寅姑洗月穀旦。武州豊島郡、東叡山勧学講院開祖、権大僧都賜号　法印兼台密禅三学沙門了翁祖休、謹んで識す。　（〈印〉了翁）（〈印〉祖休）

高野山光台院に了翁が納入した鉄眼版一切経は、今も、一冊も欠けずに遺されている。[10]

こうして三宗（天台・禅・真言）に一蔵ずつ、合計三蔵の寄進を行った了翁は、この後、一宗に一蔵では不足であろうと考えて、さらに一宗に七蔵ずつ寄進することを発願する。残る十八蔵の寄進を高野山の神である天野大明神（丹生大明神）に祈

願すると、了翁の夢に高野の神の御示現があった。感激した了翁は、二十一歳の寄進の完遂を確信したという。

実際にこの後、了翁は以下の寺院に一切経の寄進を行う。以下はみな、鉄眼版である。寄進先の寺院名は、諸説あるが、鉄眼版の出荷台帳である宝蔵院蔵『全蔵漸請千字文朱點』によれば、以下の寺院である。

・天台宗…北野興聖寺、比叡山西塔院、武州児玉郡金鑽寺、下野州長沼宗光寺、常陸州中郡月山寺（五箇寺）
・禅宗……黄檗山常住、河州法雲寺、遠州初山宝林寺、濃州小松寺、大坂天徳山国寿寺（勢州亀山円福寺）、和州小柳生法徳寺、竹田法蔵寺（七箇寺）
・真言宗…（高野山光台院、）高野山金光院、河州小西見延命寺、高野山高祖院、高野山泰雲院、高野山真別処、和州五条東浄寺、江戸湯島霊雲寺（光台院の他、七箇寺）

（4）一切経寄進後の了翁

二十一歳の一切経寄進を終えた了翁は、六十五歳で宇治黄檗山に戻り天真院を開いた。この後は、南禅寺の復興など、寺院の修繕・復興に力を注ぐ。六十六歳の時に、高泉性激の心印を受ける。この時「道覚」の名となる。翌年の六十七歳、天真院内に文庫を建てる。また仏国寺に経蔵を建て、浴室を修理、天真院の古井戸を改修し再来井と名付けた。六十八歳の折には、幼い頃に了翁を導いた斉藤自得の恩誼のため天真院の東に自得院を建てた。六十九歳では、摂津島下郡の吉祥山徳大寺を重興し、高泉性激を勧請開山とした。その頃、老病を覚えて、天真院を法嗣仁峰元善に譲り、自得院に退休した。七十三歳の折には、仏国寺第四代住持の請を受け、晋山開堂し、七十四歳で自得院に戻る。

その十一月、江戸小石川水戸藩邸からの出火によって、寛永寺及び勧学寮が類焼してしまい、その再建のために江戸に向かったとされる。七十七歳の折に、寛永寺勧学寮内客院に寓するが、翌年七十八歳の了翁は老衰を覚えて帰檗する。五月二十一日に薬食を止めて一円相を描き、「咄咄二十二日　了翁」と書いた。その翌日の二十二日に、七十八歳で亡くなった。

了翁祖休（道覚）は、一切経の寄進や勧学寮の設立など、僧侶の学問環境を整えるために、生涯を通じて尽力したのである。了翁による一切経の寄進は、三宗兼学の了翁らしく、三宗に渡って行われたが、寛永寺の寄進は最初のものであり、また勧学寮（勧学講院）の運営状況からしても最も大がかりなものであった。また寛永寺の経蔵や勧学寮は、了翁の生前だけでも、倒壊、火災など様々な災禍に見舞われるが、その度に再興に尽力したのである。

以上、了翁の生涯とその事蹟を追いつつ、寛永寺勧学講院を創建した過程を述べてきた。寛永寺の境内には、了翁の石像を祀るお堂（写真21・22）と、その脇に顕彰碑が立っている（写真23）。現在でも、毎年了翁の命日である五月二十二日に、了翁の石像前で法要が行われている。

(5) その後の勧学講院

その後の勧学講院の変遷を追っていこう。[11] 江戸時代においては東叡山の管轄であったが、明治元年（一八六八）五月、戊辰戦争の兵火によって東叡山寛永寺は炎上し、勧学講院の二百名の所化は離散して、その存続が危ぶまれることとなる。明治五年（一八七二）、東叡山寛永寺が直接管理していた勧学講院は、天台宗の総管に属し、宗務庁が管理する事になり、天台宗総黌と改称されることになった。明治六年（一八七三）には、校名を「天台宗東部総黌」と改め、校地は上野寛永寺境内に定められた。また明治十八年（一八八五）には、校名を「天台宗東部大中総黌」と改め、正式に天台宗立となる。明治三十七年（一九〇四）になると、名称を「天台宗中学」および「天台宗大学校」と改め、東京都文京区千駄木の地に場所が移った。この天台宗中学は大正十四年（一九二六）十二月十二日付で、文科省から「駒込中学校」として認可され、宗門外からの生徒も加え普通課程の教育を行うこととなり、現在の「学校法人駒込学園駒込中学校・高等学校」になっていく。

話を戻して、勧学講院の行方であるが、大正十五年（一九二六）天台宗大学・豊山大学（真言宗）・宗教大学（浄土宗）の三宗の大学を統合して大正大学を創立し、さらに昭和十八年（一九四三）智山専門学校（真言宗）が加わって三宗四派となった。そして平成三十年（二〇一八）に時宗が加わり、現在の大正大学となっている。

なお、寛永寺勧学講院の建物は、大正二年（一九一三）に、下野壬生寺（栃木県下都賀郡壬生町大師町）に移築され、現在の壬生寺本堂となっている。[12] また勧学講院の門も移築され、現在は寛永寺別院浅間山観音堂（群馬県吾妻郡嬬恋村）の惣門となっている。

寛永寺勧学講院のその後の変遷を追ってきたが、このように寛永寺勧学講院は、大正大学のうち、天台宗大学の濫觴である。その勧学講院の版木が歴史を超えて、令和の現在、大正大学附属図書館に伝えられているのである。この歴史的意義や、版木そのものの価値を理解し、今後も大切に伝えていきたいものである。

〔注〕

(1)『大正大学所蔵資料図録――仏教篇――』（初版、大正大学出版会、二〇〇三年）による。

(2) 大正大学では、平成十五年（二〇〇三）九月に、大学院学生の研究実習と「日本仏教学会」でのデモンストレーションとして、『六妙法門』の版木十六枚が実際に刷られている。（財）アダチ伝統木版画技術保存会の安達以乍牟理事長が講師となり、安達氏によって版木を印刷する実演も行われたとのことである。塩入法道先生のご厚意でその時刷ったものを拝見させていただいたが、版木は痛みや摩耗が少なく、刷られたものは大変美しく明瞭に刷られている。

(3) 版木調査の参加者は以下の通りである。学生は、佐藤圭（大学院生）、浅井美海、安藤穂乃花、今井美奈、上原千咲、大澤菜緒子、門井美月、喜多村菖己、髙野柚、小菅初月、斉藤ひかり、寺内悠、長濱音羽、中富陽太、森迫美雪、吉田真奈（以上学部学生（調査当時）、あいうえお順）など、また日本文学科の田中仁教員にご

助力を賜った。

（4）『観音玄義記講義』巻一で、丁付「卅五」は「廿五」、「廿五」は「卅五」の誤りと思われる。

（5）塩入法道「東叡山寛永寺旧蔵経論版木」（『大正大学所蔵資料図録――仏教編――』前掲注（1）による。

（6）凌雲院は現在はなく、その跡地は国立西洋美術館、東京文化会館になっている。

（7）『松沢老泉資料集』（日本書誌学大系二五、青裳堂書店、一九八二年）による。中川仁喜氏の御教示による。

（8）翻刻には、渡辺麻里子「『了翁祖休禅師行業記』について――〈付・翻刻〉秋田県公文書館蔵『了翁祖休禅師行業記』――」（『論叢アジアの文化と思想』一四、二〇〇五年一二月）、再録『東京大学総合図書館蔵嘉興大蔵経　目録と研究』研究篇（平成一七年度～二一年度文部科学省研究費補助金特定領域研究・仏教道教交渉班「宋元明における仏教道教交渉と日本宗教・思想」研究成果報告書）がある。

（9）了翁の伝記は、嵩吉靖『了翁禅師』（中央仏教社、一九二一年）、今沢慈海『了翁禅師小伝』（成田山財団、一九六四年）、川瀬信雄『名僧・了翁禅師伝』（女性仏教社、一九九〇年）、芝直翁『了翁禅師略伝』（一九〇七年）、吉永卯太郎「黄檗の話（五）黄檗の了翁」（黄檗宗務本院、一九四二年）、小野則秋「了翁禅師の人と業績」（『日本文庫史研究』、臨川書店、一九四四年）、田口大師『湯沢の生んだ名僧　了翁さま』（無明舎出版、一九九四年）などがある。また了翁についての研究には、『黄檗文化人名辞典』「了翁道覚」の項（大槻幹郎他編、思文閣出版、一九八八年）、松永知海「［研究ノート］天真了翁禅師研究の課題」（『黄檗文華』一二三号、二〇〇四年七月）、内山純子・渡辺麻里子『（曜光山月山寺）了翁寄進鉄眼版一切経目録』（月山寺、二〇〇一年）、内山純子「近世中期の仏教界革新・佛教学興隆に貢献した黄檗僧了翁禅師――東叡山勧学院の創設と台密禅二十一ヶ寺への一切経施経を中心に――」（『黄檗文華』一二三号、二〇〇四年七月）、内山純子「了翁禅師と東叡山勧学講院――近世仏教史の推移から見た了翁創建の勧学講院――」（『山家学会紀要』九、二〇〇七年七月）、Paul Groner「Ryoo Dokaku 了翁道覚（1630-1707）, Ascetic, Philanthropist, Bibliophile, and Entrepeneur: The Creation of Japan's First Public Library, Part 1」（『山家学会紀要』九、二〇〇七年七月）、ヴォルフガング・シャモニ「公開と非公開の間――江戸時代の「自伝」についての一考察――」（『みすず』五〇三号、二〇〇三年三月）、渡辺麻里子「曜光山月山寺蔵了翁寄進鉄眼版一切経について」（『黄檗文華』一二二、二〇〇二年六月）、同「月山寺蔵了翁寄進鉄眼版一切経」（『曜光山月山寺史』月山寺、二〇〇四年）、同「高野山真別処蔵了翁寄進鉄眼版一切経について」（『黄檗文華』一二三、二〇〇四年七月）、同「了翁の一切経寄進について――叡山文庫生源寺蔵鉄眼版一切経と天台宗寺院への寄進――」（『山家学会紀要』九、二〇〇七年七月）などがある。

（10）高野山光台院への寄進については、渡辺麻里子「鉄眼版一切経の意義――了翁祖休による高野山光台院への寄進――」（『寺院文献資料学の新展開』臨川書店、二〇二〇年）に詳細を記した。

（11）勧学講院の変遷については、『大正大学五十年略史』（大正大学五十年史編纂委員会、一九七六年）、内山純子「近世中期の仏教界革新・佛教学興隆に貢献した黄檗僧了翁禅師」（前掲注（7））などを参照した。

（12）この移築は、寛永寺が壬生寺に勧学寮の建物を売却したことによるもので、これを批判した記事が、『萬朝報』に掲載されている。『萬朝報』の大正二年（一九一三）十二月二十二日の記事には次のように記される。

勧学寮廃滅す　△寛永寺非難の声あり

上野、東京音楽学校裏手、寛永寺所属の勧学寮は何時の間にか取払はれ、其空地に借家を建設する事となり目下地均らしをしてゐる。之れに就て寛永寺の処置を非難するものが、天台宗識者の間に多い。勧学寮は徳川時代に於ける宗教教育の根源地である。三代将軍時代の名僧了翁禅師が輪王寺門跡の信頼を得て不忍弁天堂の側に図書寮を起し、後勧学寮を建てたので、爾来明治維新の際まで僧侶教育の機関であつた。後年其徳を頌すべく禅師の石像と頌徳碑を寮庭に建てゝ一山の僧侶をして常に之に礼拝せしめてゐた程であるから、寛永寺としては宗教教育の記念として、禅師の徳を後代に伝へる手段として永久是を保存せねばならぬ責任がある。然るに本年慈覚大師の千五百年忌に当るので、大師出生の地野州〈壬生町〉に於て慈覚堂を建設する企てあつた昨年末、寛永寺は右の勧学寮を〈壬生町〉へ一千円に売渡して了ひ、其金は天台宗大学の校費となつたといふ。併し大学にして金の必要あらば他に幾多の方法があらうといふのが非難者の声である。建物は売却後の今日如何ともする能はざれど、若し了翁禅師の像をも他へ移して其跡へ借家を建てるが如きことあらば反対者必ず続々として起るべく想はる。風聞によれば天台宗大学の教授連は勧学寮売却代の一部を以て、本月上旬向島太陽閣に教授会を開いたともいふ。事の実否は知らねど俗界に超然たるべき筈の緇徒の間に醜聞を伝へらるゝは喜ぶべきでない。

〔付記〕貴重な版木の調査をご許可下さいました大正大学附属図書館に心より御礼申し上げます。

（わたなべ・まりこ　本学教授）

〔写真21〕　寛永寺了翁石像

〔写真23〕　寛永寺了翁顕彰碑

〔写真22〕　寛永寺了翁石像

〈付表〉　大正大学附属図書館蔵東叡山旧蔵版木一覧

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
1	A	1	92	1	観音玄義記講義	巻一	一	本文	23.0	47.0	19.4	13.5	28.6	○
1	A	1	92	2	観音玄義記講義	巻一	二	本文	23.0	47.0	19.7	13.5	28.6	○
2	A	2	93	1	観音玄義記講義	巻一	三	本文	23.5	46.7	18.7	13.3	28.3	○
2	A	2	93	2	観音玄義記講義	巻一	四	本文	23.5	46.7	19.1	13.6	28.5	○
3	A	3	94	1	観音玄義記講義	巻一	五	本文	23.1	46.7	19.5	13.5	28.7	○
3	A	3	94	2	観音玄義記講義	巻一	六	本文	23.1	46.7	19.7	13.6	28.7	○
4	A	4	95	1	観音玄義記講義	巻一	七	本文	23.2	46.9	19.5	13.6	28.7	○
4	A	4	95	2	観音玄義記講義	巻一	八	本文	23.2	46.9	19.5	13.6	28.6	○
5	A	5	96	1	観音玄義記講義	巻一	九	本文	23.4	47.0	19.5	13.5	28.7	○
5	A	5	96	2	観音玄義記講義	巻一	十	本文	23.4	47.0	19.6	13.6	28.6	○
6	A	6	142	1	観音玄義記講義	巻一	十一	本文	23.6	47.2	19.6	13.6	28.7	○
6	A	6	142	2	観音玄義記講義	巻一	十二	本文	23.6	47.2	19.6	13.5	28.6	○
7	A	7	143	1	観音玄義記講義	巻一	十三	本文	23.5	47.0	19.7	13.5	28.6	○
7	A	7	143	2	観音玄義記講義	巻一	十四	本文	23.5	47.0	19.6	13.6	28.8	○
8	A	8	144	1	観音玄義記講義	巻一	十七	本文	23.3	47.2	19.5	13.4	28.8	○
8	A	8	144	2	観音玄義記講義	巻一	十八	本文	23.3	47.2	19.7	13.5	28.8	○
9	A	9	145	1	観音玄義記講義	巻一	十九	本文	23.8	45.5	19.7	13.6	28.7	○
9	A	9	145	2	観音玄義記講義	巻一	二十	本文	23.8	45.5	19.7	13.5	28.7	○
10	A	10	146	1	観音玄義記講義	巻一	廿一	本文	23.4	47.4	19.8	13.5	28.8	○
10	A	10	146	2	観音玄義記講義	巻一	廿二	本文	23.4	47.4	19.7	13.6	28.7	○
11	A	11	147	1	観音玄義記講義	巻一	廿三	本文	23.5	46.9	19.6	13.5	28.6	○
11	A	11	147	2	観音玄義記講義	巻一	廿四	本文	23.5	46.9	19.7	13.6	28.6	○
12	A	12	148	1	観音玄義記講義	巻一	卅五（ママ）	本文	23.3	45.4	19.6	13.6	28.7	△
12	A	12	148	2	観音玄義記講義	巻一	廿六	本文	23.3	45.4	19.6	13.6	28.7	△
13	A	13	149	1	観音玄義記講義	巻一	廿七	本文	23.3	47.7	19.5	13.5	28.5	○
13	A	13	149	2	観音玄義記講義	巻一	廿八	本文	23.3	47.7	19.6	13.6	28.6	○
14	A	14	150	1	観音玄義記講義	巻一	廿九	本文	23.3	46.5	19.5	13.5	28.6	○
14	A	14	150	2	観音玄義記講義	巻一	三十	本文	23.3	46.5	19.5	13.5	28.6	○
15	A	15	246	1	観音玄義記講義	巻一	卅一	本文	23.5	46.9	19.5	13.5	28.7	○
15	A	15	246	2	観音玄義記講義	巻一	卅二	本文	23.5	46.9	19.6	13.5	28.7	○
16	A	16	247	1	観音玄義記講義	巻一	卅三	本文	23.2	46.7	19.3	13.5	28.6	○
16	A	16	247	2	観音玄義記講義	巻一	卅四	本文	23.2	46.7	19.5	13.5	28.5	○
17	A	17	248	1	観音玄義記講義	巻一	廿五（ママ）	本文	23.4	47.0	19.5	13.6	28.6	○
17	A	17	248	2	観音玄義記講義	巻一	卅六	本文	23.4	47.0	19.7	13.5	28.6	○
18	A	18	249	1	観音玄義記講義	巻一	卅七	本文	23.5	47.2	19.6	13.5	28.5	○
18	A	18	249	2	観音玄義記講義	巻一	卅八	本文	23.5	47.2	19.6	13.5	28.6	○
19	A	19	250	1	観音玄義記講義	巻一	卅九	本文	23.5	47.2	19.5	13.5	28.7	○
19	A	19	250	2	観音玄義記講義	巻一	四十	本文	23.5	47.2	19.6	13.6	28.8	○
20	A	20	252	1	観音玄義記講義	巻一	四十一	本文	23.3	46.7	19.7	13.6	28.6	○
20	A	20	252	2	観音玄義記講義	巻一	四十二	本文	23.3	46.7	19.6	13.5	28.7	○
21	A	21	253	1	観音玄義記講義	巻一	四十五	本文	23.7	47.2	19.8	13.6	28.7	○
21	A	21	253	2	観音玄義記講義	巻一	四十六	本文	23.7	47.2	19.8	13.7	28.8	○
22	A	22	254	1	観音玄義記講義	巻一	四十七	本文	23.8	47.4	19.6	13.6	28.8	○
22	A	22	254	2	観音玄義記講義	巻一	四十八	本文	23.8	47.4	19.6	13.6	28.7	○
23	A	23	255	1	観音玄義記講義	巻一	四十九	本文	23.8	47.0	19.6	13.5	28.8	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
23	A	23	255	2	観音玄義記講義	巻一	五十	本文	23.8	47.0	19.8	13.5	28.7	○
24	A	24	256	1	観音玄義記講義	巻一	五十一	本文	23.7	47.2	19.4	13.6	28.7	○
24	A	24	256	2	観音玄義記講義	巻一	五十二	本文	23.7	47.2	19.5	13.6	28.7	○
25	A	25	81	1	観音玄義記講義	巻二	一	本文	23.2	45.8	19.7	13.6	29.3	○
25	A	25	81	2	観音玄義記講義	巻二	二	本文	23.2	45.8	19.8	13.6	28.9	○
26	A	26	90	1	観音玄義記講義	巻二	三	本文	23.1	45.7	19.6	13.6	28.7	○
26	A	26	90	2	観音玄義記講義	巻二	四	本文	23.1	45.7	19.5	13.6	28.7	○
27	A	27	82	1	観音玄義記講義	巻二	五	本文	23.7	43.6	19.9	13.3	28.8	△
27	A	27	82	2	観音玄義記講義	巻二	六	本文	23.7	43.6	19.6	13.6	28.7	△
28	A	28	83	1	観音玄義記講義	巻二	七	本文	23.5	43.5	19.5	13.5	28.6	△
28	A	28	83	2	観音玄義記講義	巻二	八	本文	23.5	43.5	19.5	13.5	28.6	△
29	A	29	84	1	観音玄義記講義	巻二	九	本文	23.4	45.8	19.7	13.6	28.7	○
29	A	29	84	2	観音玄義記講義	巻二	十	本文	23.4	45.8	19.5	13.5	28.7	○
30	A	30	85	1	観音玄義記講義	巻二	十一	本文	23.1	43.2	19.6	13.5	28.7	△
30	A	30	85	2	観音玄義記講義	巻二	十二	本文	23.1	43.2	19.7	13.5	28.7	△
31	A	31	86	1	観音玄義記講義	巻二	十三	本文	23.1	45.7	19.6	13.7	28.7	○
31	A	31	86	2	観音玄義記講義	巻二	十四	本文	23.1	45.7	19.8	13.6	28.7	○
32	A	32	87	1	観音玄義記講義	巻二	十五	本文	23.4	45.7	19.4	13.6	28.8	○
32	A	32	87	2	観音玄義記講義	巻二	十六	本文	23.4	45.7	19.5	13.5	28.7	○
33	A	33	88	1	観音玄義記講義	巻二	十七	本文	23.2	45.8	19.4	13.2	28.1	○
33	A	33	88	2	観音玄義記講義	巻二	十八	本文	23.2	45.8	18.6	13.5	27.1	○
34	A	34	89	1	観音玄義記講義	巻二	十九	本文	23.3	45.8	19.5	13.5	28.6	○
34	A	34	89	2	観音玄義記講義	巻二	二十	本文	23.3	45.8	19.7	13.5	28.6	○
35	A	35	132	1	観音玄義記講義	巻二	廿一	本文	23.1	46.0	19.6	13.6	28.7	○
35	A	35	132	2	観音玄義記講義	巻二	廿二	本文	23.1	46.0	19.5	13.6	28.8	○
36	A	36	133	1	観音玄義記講義	巻二	廿三	本文	23.2	45.6	19.6	13.5	28.7	○
36	A	36	133	2	観音玄義記講義	巻二	廿四	本文	23.2	45.6	19.6	13.6	28.7	○
37	A	37	134	1	観音玄義記講義	巻二	廿五	本文	21.7	41.0	19.6	13.6	28.8	×
37	A	37	134	2	観音玄義記講義	巻二	廿六	本文	21.7	41.0	19.6	13.0	28.8	×
38	A	38	135	1	観音玄義記講義	巻二	廿七	本文	23.0	45.6	19.4	13.1	28.7	○
38	A	38	135	2	観音玄義記講義	巻二	廿八	本文	23.0	45.6	19.4	13.6	28.6	○
39	A	39	228	1	観音玄義記講義	巻二	卅一	本文	23.1	45.8	19.5	13.5	28.8	○
39	A	39	228	2	観音玄義記講義	巻二	卅二	本文	23.1	45.8	19.5	13.5	28.8	○
40	A	40	229	1	観音玄義記講義	巻二	卅五	本文	23.5	45.6	19.6	13.6	28.7	○
40	A	40	229	2	観音玄義記講義	巻二	卅六	本文	23.5	45.6	19.7	13.7	28.8	○
41	A	41	230	1	観音玄義記講義	巻二	廿九	本文	21.7	42.5	19.5	13.5	28.7	×
41	A	41	230	2	観音玄義記講義	巻二	三十	本文	21.7	42.5	19.6	13.5	28.7	×
42	A	42	232	1	観音玄義記講義	巻二	卅三	本文	23.4	45.8	19.4	13.6	28.6	○
42	A	42	232	2	観音玄義記講義	巻二	卅四	本文	23.4	45.8	19.2	13.6	28.7	○
43	A	43	231	1	観音玄義記講義	巻二	卅七	本文	23.2	45.4	19.3	13.5	28.6	○
43	A	43	231	2	観音玄義記講義	巻二	卅八	本文	23.2	45.4	19.3	13.5	28.6	○
44	A	44	234	1	観音玄義記講義	巻二	卅九	本文	23.3	45.8	19.3	13.5	28.7	○
44	A	44	234	2	観音玄義記講義	巻二	四十	本文	23.3	45.8	19.3	13.6	28.6	○
45	A	45	235	1	観音玄義記講義	巻二	四十一	本文	23.2	45.7	19.4	13.6	28.7	○
45	A	45	235	2	観音玄義記講義	巻二	四十二	本文	23.2	45.7	19.4	13.5	28.7	○
46	A	46	233	1	観音玄義記講義	巻二	四十三	本文	23.1	45.7	19.7	13.5	28.7	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
46	A	46	233	2	観音玄義記講義	巻二	四十四	本文	23.1	45.7	19.7	13.5	28.6	○
47	A	47	184	1	観音玄義記講義	巻三	一	本文	23.4	45.9	19.7	13.5	28.6	○
47	A	47	184	2	観音玄義記講義	巻三	二	本文	23.4	45.9	19.7	13.5	28.6	○
48	A	48	185	1	観音玄義記講義	巻三	三	本文	23.2	45.5	19.7	13.6	28.8	○
48	A	48	185	2	観音玄義記講義	巻三	四	本文	23.2	45.5	19.7	13.5	28.7	○
49	A	49	186	1	観音玄義記講義	巻三	五	本文	23.6	47.1	19.6	13.6	28.8	○
49	A	49	186	2	観音玄義記講義	巻三	六	本文	23.6	47.1	19.7	13.5	28.8	○
50	A	50	187	1	観音玄義記講義	巻三	七	本文	23.3	45.5	19.4	13.5	28.6	○
50	A	50	187	2	観音玄義記講義	巻三	八	本文	23.3	45.5	19.6	13.6	28.5	○
51	A	51	188	1	観音玄義記講義	巻三	九	本文	23.1	45.3	19.3	13.5	28.6	○
51	A	51	188	2	観音玄義記講義	巻三	十	本文	23.1	45.3	19.3	13.5	28.6	○
52	A	52	189	1	観音玄義記講義	巻三	十一	本文	23.3	45.5	19.8	13.6	28.8	○
52	A	52	189	2	観音玄義記講義	巻三	十二	本文	23.3	45.5	19.7	13.6	28.8	○
53	A	53	136	1	観音玄義記講義	巻三	十三	本文	23.2	45.4	19.5	13.6	28.8	○
53	A	53	136	2	観音玄義記講義	巻三	十四	本文	23.2	45.4	19.6	13.5	28.6	○
54	A	54	137	1	観音玄義記講義	巻三	十五	本文	23.1	45.3	19.6	13.5	28.6	○
54	A	54	137	2	観音玄義記講義	巻三	十六	本文	23.1	45.3	19.5	13.5	28.5	○
55	A	55	138	1	観音玄義記講義	巻三	十七	本文	23.2	45.3	19.3	13.5	28.6	○
55	A	55	138	2	観音玄義記講義	巻三	十八	本文	23.2	45.3	19.4	13.6	28.6	○
56	A	56	139	1	観音玄義記講義	巻三	十九	本文	23.3	45.3	19.5	13.5	28.6	○
56	A	56	139	2	観音玄義記講義	巻三	二十	本文	23.3	45.3	19.6	13.5	28.5	○
57	A	57	140	1	観音玄義記講義	巻三	二十一	本文	23.3	45.4	19.8	13.5	28.7	○
57	A	57	140	2	観音玄義記講義	巻三	二十二	本文	23.3	45.4	19.7	13.5	28.6	○
58	A	58	141	1	観音玄義記講義	巻三	二十三	本文	23.2	45.2	19.5	13.5	28.5	○
58	A	58	141	2	観音玄義記講義（裏面未刻）	／	／	／	／	／	／	／	／	／
59	A	59	190	1	観音玄義記講義	巻四	一	本文	23.4	45.8	19.6	13.6	28.8	○
59	A	59	190	2	観音玄義記講義	巻四	二	本文	23.4	45.8	19.6	13.6	28.8	○
60	A	60	191	1	観音玄義記講義	巻四	三	本文	23.5	45.8	19.7	13.5	28.6	○
60	A	60	191	2	観音玄義記講義	巻四	四	本文	23.5	45.8	19.7	13.5	28.6	○
61	A	61	192	1	観音玄義記講義	巻四	五	本文	23.7	45.7	19.8	13.5	28.8	○
61	A	61	192	2	観音玄義記講義	巻四	六	本文	23.7	45.7	19.7	13.6	28.7	○
62	A	62	193	1	観音玄義記講義	巻四	七	本文	23.3	45.6	19.7	13.6	28.6	○
62	A	62	193	2	観音玄義記講義	巻四	八	本文	23.3	45.6	19.7	13.6	28.6	○
63	A	63	194	1	観音玄義記講義	巻四	九	本文	23.7	46.1	19.7	13.5	28.7	○
63	A	63	194	2	観音玄義記講義	巻四	十	本文	23.7	46.1	19.7	13.6	28.7	○
64	A	64	195	1	観音玄義記講義	巻四	十一	本文	23.9	45.8	19.8	13.5	28.7	○
64	A	64	195	2	観音玄義記講義	巻四	十二	本文	23.9	45.8	19.9	13.5	28.6	○
65	A	65	196	1	観音玄義記講義	巻四	十三	本文	23.1	45.6	19.7	13.5	28.7	○
65	A	65	196	2	観音玄義記講義	巻四	十四	本文	23.1	45.6	19.7	13.5	28.7	○
66	A	66	197	1	観音玄義記講義	巻四	十五	本文	23.1	45.6	19.6	13.5	28.8	○
66	A	66	197	2	観音玄義記講義	巻四	十六	本文	23.1	45.6	19.6	13.6	28.7	○
67	A	67	198	1	観音玄義記講義	巻四	十七	本文	23.3	44.2	19.6	13.5	28.6	△
67	A	67	198	2	観音玄義記講義	巻四	十八	本文	23.3	44.2	19.7	13.5	28.6	△
68	A	68	199	1	観音玄義記講義	巻四	十九	本文	23.6	45.8	19.7	13.5	28.7	○
68	A	68	199	2	観音玄義記講義	巻四	二十	本文	23.6	45.8	19.6	13.4	28.7	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
69	A	69	200	1	観音玄義記講義	巻四	二十一	本文	23.1	45.6	19.6	13.6	28.8	○
69	A	69	200	2	観音玄義記講義	巻四	二十二	本文	23.1	45.6	19.7	13.6	28.8	○
70	A	70	251	1	観音玄義記講義（右面未刻）	巻四	二十三	本文	22.9	45.7	19.5	13.5	28.6	○
70	A	70	251	2	観音玄義記講義	／	／	題箋	22.9	45.7	17.2	／	2.3	○
71	A	71	91	1	観音玄義記講義	／	／	見返・題箋	23.2	44.1	／	／	／	△
71	A	71	91	2	観音玄義記講義	／	／	刊記	23.2	44.1	19.3	13.4	28.6	△
72	B	1	67	1	十不二門指要鈔会本	／	壹	序	22.9	41.8	19.5	13.5	28.9	○
72	B	1	67	2	十不二門指要鈔会本	／	貳	序	22.9	41.8	19.5	13.7	29.2	○
73	B	2	68	1	十不二門指要鈔会本	／	壹	序	21.6	42.1	19.7	13.5	29.1	○
73	B	2	68	2	十不二門指要鈔会本	／	貳	序	21.6	42.1	19.6	13.5	29.2	○
74	B	3	66	1	十不二門指要鈔会本	／	壹	凡例	22.0	42.0	19.7	13.6	29.1	○
74	B	3	66	2	十不二門指要鈔会本	／	貳	凡例	22.0	42.0	19.6	13.6	29.1	○
75	B	4	73	1	十不二門指要鈔会本	巻上	一	本文	22.7	41.5	19.8	13.6	29.1	○
75	B	4	73	2	十不二門指要鈔会本	巻上	二	本文	22.7	41.5	19.5	13.5	29.1	○
76	B	5	126	1	十不二門指要鈔会本	巻上	三	本文	23.3	41.8	19.8	13.6	29.1	○
76	B	5	126	2	十不二門指要鈔会本	巻上	四	本文	23.3	41.8	19.6	13.6	29.1	○
77	B	6	70	1	十不二門指要鈔会本	巻上	五	本文	20.8	41.7	19.3	13.5	29.1	○
77	B	6	70	2	十不二門指要鈔会本	巻上	六	本文	20.8	41.7	19.5	13.5	29.1	○
78	B	7	72	1	十不二門指要鈔会本	巻上	七	本文	23.5	41.9	19.6	13.6	29.2	○
78	B	7	72	2	十不二門指要鈔会本	巻上	八	本文	23.5	41.9	19.7	13.6	29.2	○
79	B	8	71	1	十不二門指要鈔会本	巻上	九	本文	23.1	41.6	19.5	13.5	28.9	○
79	B	8	71	2	十不二門指要鈔会本	巻上	十	本文	23.1	41.6	19.5	13.5	29.0	○
80	B	9	121	1	十不二門指要鈔会本	巻上	十一	本文	23.3	41.8	19.8	13.6	29.1	×
80	B	9	121	2	十不二門指要鈔会本	巻上	十五	本文	23.3	41.8	19.7	13.6	29.2	×
81	B	10	122	1	十不二門指要鈔会本	巻上	十三	本文	20.7	40.9	19.3	13.1	28.6	○
81	B	10	122	2	十不二門指要鈔会本	巻上	十四	本文	20.7	40.9	19.2	13.1	28.8	○
82	B	11	123	1	十不二門指要鈔会本	巻上	十二	本文	22.4	41.8	19.8	13.6	29.0	×
82	B	11	123	2	十不二門指要鈔会本	巻上	十六	本文	22.4	41.8	19.7	13.6	29.1	×
83	B	12	124	1	十不二門指要鈔会本	巻上	十七	本文	23.0	41.7	19.5	13.6	29.1	×
83	B	12	124	2	十不二門指要鈔会本	巻上	十八	本文	23.0	41.7	19.5	13.6	29.1	×
84	B	13	125	1	十不二門指要鈔会本	巻上	十九	本文	20.8	41.7	19.6	13.5	29.1	○
84	B	13	125	2	十不二門指要鈔会本	巻上	二十	本文	20.8	41.7	19.6	13.5	29.0	○
85	B	14	127	1	十不二門指要鈔会本	巻上	二十一	本文	22.6	41.9	20.0	13.6	29.2	○
85	B	14	127	2	十不二門指要鈔会本	巻上	二十二	本文	22.6	41.9	19.8	13.6	29.3	○
86	B	15	128	1	十不二門指要鈔会本	巻上	二十三	本文	23.2	41.9	19.8	13.6	29.2	○
86	B	15	128	2	十不二門指要鈔会本	巻上	二十四	本文	23.2	41.9	19.6	13.6	29.1	○
87	B	16	129	1	十不二門指要鈔会本	巻上	二十五	本文	21.7	41.7	19.3	13.6	29.2	○
87	B	16	129	2	十不二門指要鈔会本	巻上	二十六	本文	21.7	41.7	19.3	13.6	29.2	○
88	B	17	130	1	十不二門指要鈔会本	巻上	二十七	本文	22.5	41.7	19.6	13.6	29.3	○
88	B	17	130	2	十不二門指要鈔会本	巻上	二十八	本文	22.5	41.7	19.6	13.5	29.0	○
89	B	18	131	1	十不二門指要鈔会本	巻上	二十九	本文	23.0	41.9	19.6	13.6	29.1	○
89	B	18	131	2	十不二門指要鈔会本	巻上	三十	本文	23.0	41.9	19.6	13.6	29.0	○
90	B	19	75	1	十不二門指要鈔会本	巻上	三十一	本文	22.2	41.1	19.6	13.5	29.1	○
90	B	19	75	2	十不二門指要鈔会本	巻上	三十二	本文	22.2	41.1	19.6	13.7	29.2	○
91	B	20	74	1	十不二門指要鈔会本	巻上	三十三	本文	22.5	41.6	19.5	13.6	29.1	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
91	B	20	74	2	十不二門指要鈔会本	巻上	三十四	本文	22.5	41.6	19.9	13.6	29.3	○
92	B	21	223	1	十不二門指要鈔会本	巻下	一	本文	22.8	41.7	19.5	13.5	29.1	○
92	B	21	223	2	十不二門指要鈔会本	巻下	二	本文	22.8	41.7	19.1	13.6	29.1	○
93	B	22	224	1	十不二門指要鈔会本	巻下	三	本文	23.0	41.9	19.5	13.5	29.0	○
93	B	22	224	2	十不二門指要鈔会本	巻下	四	本文	23.0	41.9	19.5	13.5	29.0	○
94	B	23	225	1	十不二門指要鈔会本	巻下	五	本文	22.8	42.6	19.7	13.6	29.2	○
94	B	23	225	2	十不二門指要鈔会本	巻下	六	本文	22.8	42.6	19.7	13.6	29.2	○
95	B	24	226	1	十不二門指要鈔会本	巻下	七	本文	22.5	41.4	19.7	13.5	29.0	○
95	B	24	226	2	十不二門指要鈔会本	巻下	八	本文	22.5	41.4	19.7	13.6	29.2	○
96	B	25	227	1	十不二門指要鈔会本	巻下	九	本文	20.8	42.2	19.6	13.5	29.0	○
96	B	25	227	2	十不二門指要鈔会本	巻下	十	本文	20.8	42.2	19.7	13.7	29.2	○
97	B	26	219	1	十不二門指要鈔会本	巻下	十一	本文	23.1	41.9	19.7	13.6	29.2	○
97	B	26	219	2	十不二門指要鈔会本	巻下	十二	本文	23.1	41.9	19.8	13.6	29.2	○
98	B	27	220	1	十不二門指要鈔会本	巻下	十三	本文	23.3	42.2	20.7	13.5	29.1	○
98	B	27	220	2	十不二門指要鈔会本	巻下	十四	本文	23.3	42.2	19.8	13.1	29.2	○
99	B	28	221	1	十不二門指要鈔会本	巻下	十五	本文	22.4	41.7	19.6	13.5	29.1	○
99	B	28	221	2	十不二門指要鈔会本	巻下	十六	本文	22.4	41.7	22.1	13.5	29.0	○
100	B	29	222	1	十不二門指要鈔会本	巻下	十七	本文	22.4	41.0	19.5	13.5	29.1	○
100	B	29	222	2	十不二門指要鈔会本	巻下	十八	本文	22.4	41.0	19.5	13.5	29.1	○
101	B	30	120	1	十不二門指要鈔会本	巻下	十九	本文	22.7	41.9	19.3	13.3	28.7	○
101	B	30	120	2	十不二門指要鈔会本	巻下	二十	本文	22.7	41.9	19.5	13.3	28.8	○
102	B	31	76	1	十不二門指要鈔会本	巻下	二十一	本文	22.3	41.1	19.7	13.6	29.1	○
102	B	31	76	2	十不二門指要鈔会本	巻下	二十二	本文	22.3	41.1	19.7	13.7	29.3	○
103	B	32	77	1	十不二門指要鈔会本	巻下	二十三	本文	22.9	42.7	19.6	13.6	29.2	○
103	B	32	77	2	十不二門指要鈔会本	巻下	二十四	本文	22.9	42.7	19.5	13.4	29.0	○
104	B	33	78	1	十不二門指要鈔会本	巻下	二十五	本文	22.6	41.2	19.7	13.5	29.2	○
104	B	33	78	2	十不二門指要鈔会本	巻下	二十六	本文	22.6	41.2	19.8	13.5	29.2	○
105	B	34	79	1	十不二門指要鈔会本	巻下	二十七	本文	23.0	42.0	19.6	13.6	29.1	○
105	B	34	79	2	十不二門指要鈔会本	巻下	二十八	本文	23.0	42.0	19.7	13.6	29.2	○
106	B	35	80	1	十不二門指要鈔会本	巻下	二十九	本文	22.3	42.7	19.7	13.6	29.1	○
106	B	35	80	2	十不二門指要鈔会本	巻下	三十	本文	22.3	42.7	19.6	13.6	29.2	○
107	B	36	29	1	十不二門指要鈔会本	巻下	三十一	本文	22.7	41.6	19.7	13.6	29.1	○
107	B	36	29	2	十不二門指要鈔会本	巻下	三十二	本文	22.7	41.6	19.5	13.5	29.0	○
108	B	37	30	1	十不二門指要鈔会本	巻下	三十三	本文	22.9	42.6	19.7	13.6	29.1	○
108	B	37	30	2	十不二門指要鈔会本	巻下	三十四	本文	22.9	42.6	19.7	13.6	29.1	○
109	B	38	31	1	十不二門指要鈔会本	巻下	三十五	本文	22.8	42.3	19.5	13.5	29.1	○
109	B	38	31	2	十不二門指要鈔会本	巻下	三十六	本文	22.8	42.3	19.6	13.6	29.1	○
110	B	39	32	1	十不二門指要鈔会本	巻下	三十七	本文	22.3	42.3	19.6	13.4	29.0	○
110	B	39	32	2	十不二門指要鈔会本	巻下	三十八	本文	22.3	42.3	19.5	13.5	29.0	○
111	B	40	69	1	十不二門指要鈔会本	／	／	見返・題箋	22.6	41.2	／	／	／	○
111	B	40	69	2	十不二門指要鈔会本	／	／	跋	22.6	41.2	19.4	13.5	29.0	○
112	C	1	2	1	金剛錍巾免解	／	○	序	22.7	43.9	21.0	14.6	30.7	×
112	C	1	2	2	金剛錍巾免解	／	○	叙	22.7	43.9	20.7	14.4	30.6	×
113	C	2	3	1	金剛錍巾免解	／	壹	自序	25.0	46.0	20.9	14.1	30.5	○
113	C	2	3	2	金剛錍巾免解	／	貳	自序	25.0	46.0	20.9	14.4	30.5	○
114	C	3	4	1	金剛錍巾免解	巻上	一	本文	24.4	47.2	20.7	14.6	30.7	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
114	C	3	4	2	金剛錍巾免解	巻上	二	本文	24.4	47.2	20.6	14.6	30.7	○
115	C	4	5	1	金剛錍巾免解	巻上	三	本文	24.0	47.1	20.9	14.6	30.6	○
115	C	4	5	2	金剛錍巾免解	巻上	四	本文	24.0	47.1	21.0	14.6	30.8	○
116	C	5	6	1	金剛錍巾免解	巻上	五	本文	24.2	47.0	20.8	14.5	30.6	○
116	C	5	6	2	金剛錍巾免解	巻上	六	本文	24.2	47.0	21.0	14.5	30.8	○
117	C	6	7	1	金剛錍巾免解	巻上	七	本文	24.0	47.3	21.0	14.6	30.6	○
117	C	6	7	2	金剛錍巾免解	巻上	八	本文	24.0	47.3	21.3	14.5	30.6	○
118	C	7	8	1	金剛錍巾免解	巻上	九	本文	23.6	47.0	20.8	14.6	30.8	○
118	C	7	8	2	金剛錍巾免解	巻上	十	本文	23.6	47.0	20.9	14.5	30.7	○
119	C	8	9	1	金剛錍巾免解	巻上	十一	本文	23.8	44.5	21.2	14.5	30.9	△
119	C	8	9	2	金剛錍巾免解	巻上	十二	本文	23.8	44.5	21.1	14.7	30.8	△
120	C	9	10	1	金剛錍巾免解	巻上	十三	本文	24.2	47.1	21.0	14.6	30.7	○
120	C	9	10	2	金剛錍巾免解	巻上	十四	本文	24.2	47.1	21.0	14.4	30.7	○
121	C	10	11	1	金剛錍巾免解	巻上	十五	本文	24.0	47.2	20.9	14.5	30.7	○
121	C	10	11	2	金剛錍巾免解	巻上	十六	本文	24.0	47.2	20.9	14.5	30.6	○
122	C	11	12	1	金剛錍巾免解	巻上	十七	本文	24.2	46.9	21.0	14.5	30.6	○
122	C	11	12	2	金剛錍巾免解	巻上	十八	本文	24.2	46.9	21.0	14.5	30.7	○
123	C	12	13	1	金剛錍巾免解	巻上	十九	本文	23.9	46.9	21.1	14.6	30.7	○
123	C	12	13	2	金剛錍巾免解	巻上	二十	本文	23.9	46.9	21.2	14.6	30.8	○
124	C	13	14	1	金剛錍巾免解	巻上	二十一	本文	24.4	47.3	20.9	14.5	30.6	○
124	C	13	14	2	金剛錍巾免解	巻上	二十二	本文	24.4	47.3	20.9	14.6	30.7	○
125	C	14	15	1	金剛錍巾免解	巻上	二十三	本文	24.5	47.0	20.9	14.5	30.6	○
125	C	14	15	2	金剛錍巾免解	巻上	二十四	本文	24.5	47.0	20.9	14.5	30.7	○
126	C	15	16	1	金剛錍巾免解	巻上	二十五	本文	24.0	45.4	21.0	14.6	30.7	△
126	C	15	16	2	金剛錍巾免解	巻上	二十六	本文	24.0	45.4	20.9	14.5	30.6	△
127	C	16	17	1	金剛錍巾免解	巻上	二十七	本文	24.0	47.0	21.0	14.5	30.6	○
127	C	16	17	2	金剛錍巾免解	巻上	二十八	本文	24.0	47.0	21.0	14.6	30.6	○
128	C	17	160	1	金剛錍巾免解	巻下	一	本文	24.0	46.8	21.4	14.8	31.1	○
128	C	17	160	2	金剛錍巾免解	巻下	二	本文	24.0	46.8	21.4	14.8	31.2	○
129	C	18	161	1	金剛錍巾免解	巻下	三	本文	24.2	46.8	21.3	14.7	31.2	○
129	C	18	161	2	金剛錍巾免解	巻下	四	本文	24.2	46.8	21.5	14.7	31.1	○
130	C	19	162	1	金剛錍巾免解	巻下	五	本文	24.1	47.3	20.9	14.5	30.6	○
130	C	19	162	2	金剛錍巾免解	巻下	六	本文	24.1	47.3	21.0	14.6	30.7	○
131	C	20	163	1	金剛錍巾免解	巻下	七	本文	23.9	45.7	21.2	14.7	31.1	△
131	C	20	163	2	金剛錍巾免解	巻下	八	本文	23.9	45.7	21.2	14.6	31.2	△
132	C	21	164	1	金剛錍巾免解	巻下	九	本文	24.0	46.8	21.3	14.6	30.7	○
132	C	21	164	2	金剛錍巾免解	巻下	十	本文	24.0	46.8	21.2	14.8	31.2	○
133	C	22	57	1	金剛錍巾免解	巻下	十一	本文	23.8	47.0	21.1	14.5	31.0	○
133	C	22	57	2	金剛錍巾免解	巻下	十二	本文	23.8	47.0	22.4	14.7	31.1	○
134	C	23	58	1	金剛錍巾免解	巻下	十三	本文	24.0	45.4	20.9	14.5	30.6	△
134	C	23	58	2	金剛錍巾免解	巻下	十四	本文	24.0	45.4	20.9	14.6	30.7	△
135	C	24	59	1	金剛錍巾免解	巻下	十五	本文	24.0	47.3	20.8	14.6	30.6	○
135	C	24	59	2	金剛錍巾免解	巻下	十六	本文	24.0	47.3	20.9	14.5	30.5	○
136	C	25	60	1	金剛錍巾免解	巻下	十七	本文	24.1	45.2	20.9	14.4	30.3	△
136	C	25	60	2	金剛錍巾免解	巻下	十八	本文	24.1	45.2	20.8	14.5	30.5	△
137	C	26	61	1	金剛錍巾免解	巻下	十九	本文	24.3	47.4	21.0	14.4	30.6	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
137	C	26	61	2	金剛錍巾免解	巻下	二十	本文	24.3	47.4	21.0	14.5	30.2	○
138	C	27	165	1	金剛錍巾免解	巻下	二十一	本文	24.2	46.8	21.0	14.5	30.6	○
138	C	27	165	2	金剛錍巾免解	巻下	二十二	本文	24.2	46.8	21.1	14.4	30.7	○
139	C	28	166	1	金剛錍巾免解	巻下	二十三	本文	24.2	47.2	21.2	14.5	30.6	○
139	C	28	166	2	金剛錍巾免解	巻下	二十四	本文	24.2	47.2	21.0	14.5	30.6	○
140	C	29	167	1	金剛錍巾免解	巻下	二十五	本文	24.1	46.9	21.1	14.5	30.6	○
140	C	29	167	2	金剛錍巾免解	巻下	二十六	本文	24.1	46.9	21.2	14.5	30.6	○
141	C	30	168	1	金剛錍巾免解	巻下	二十七	本文	24.0	47.3	21.0	14.5	30.7	○
141	C	30	168	2	金剛錍巾免解	巻下	二十八	本文	24.0	47.3	20.9	14.5	30.7	○
142	C	31	1	1	金剛錍巾免解	／	／	見返・題箋	24.2	46.8	／	／	／	○
142	C	31	1	2	金剛錍巾免解	巻下	／	刊記	24.2	46.8	20.7	14.4	30.5	○
143	D	1	261	1	新刻三観義序	／	一・二	序	23.7	88.1	19.8	16.0	33.7	△
143	D	1	261	2	新刻三観義序	／	三	序	23.7	88.1	19.8	15.5	32.7	△
144	D	2	271	1	浄名経三観玄義	巻上	初・二	本文	27.2	89.1	23.4	15.9	33.0	○
144	D	2	271	2	浄名経三観玄義	巻上	三・四	本文	27.2	89.1	23.3	15.9	33.1	○
145	D	3	269	1	維摩詰経三観玄義	巻上	五・六	本文	27.0	88.0	23.2	15.7	32.8	○
145	D	3	269	2	維摩詰経三観玄義	巻上	七・八	本文	27.0	88.0	22.9	15.9	33.0	○
146	D	4	272	1	維摩詰経三観玄義	巻上	九・十	本文	27.4	87.0	23.2	15.7	32.8	○
146	D	4	272	2	維摩詰経三観玄義	巻上	十一・十二	本文	27.4	87.0	23.6	16.0	33.1	○
147	D	5	101	1	維摩詰経三観玄義	巻上	十三	本文	27.4	47.7	23.4	15.7	32.7	○
147	D	5	101	2	維摩詰経三観玄義	巻上	十四	本文	27.4	47.7	23.7	16.0	33.0	○
148	D	6	102	1	維摩詰経三観玄義	巻上	十五	本文	27.2	47.1	23.4	15.9	33.0	○
148	D	6	102	2	維摩詰経三観玄義	巻上	十六	本文	27.2	47.1	23.1	15.8	33.0	○
149	D	7	103	1	維摩詰経三観玄義	巻上	十七	本文	27.3	47.1	23.3	15.9	33.1	○
149	D	7	103	2	維摩詰経三観玄義	巻上	十八	本文	27.3	47.1	23.5	15.8	32.9	○
150	D	8	104	1	維摩詰経三観玄義	巻上	十九	本文	27.0	45.9	23.4	15.9	32.9	△
150	D	8	104	2	維摩詰経三観玄義	巻上	二十	本文	27.0	45.9	23.3	15.9	32.9	△
151	D	9	105	1	維摩詰経三観玄義	巻上	廿一	本文	27.0	46.8	23.5	15.7	32.8	○
151	D	9	105	2	維摩詰経三観玄義	巻上	廿二	本文	27.0	46.8	23.6	16.0	33.0	○
152	D	10	106	1	維摩詰経三観玄義	巻上	廿三	本文	27.0	46.4	23.4	15.8	32.8	○
152	D	10	106	2	維摩詰経三観玄義（裏面未刻）	／	／	／	27.0	46.4	／	／	／	○
153	D	11	107	1	維摩詰経三観玄義	巻上	廿四	本文	27.2	47.2	23.5	15.8	32.9	○
153	D	11	107	2	維摩詰経三観玄義	巻上	廿五	本文	27.2	47.2	23.4	15.9	33.0	○
154	D	12	270	1	維摩詰経三観玄義	巻下	一・二	本文	27.7	89.0	23.6	15.8	33.0	○
154	D	12	270	2	維摩詰経三観玄義	巻下	三・四	本文	27.7	89.0	23.5	15.8	32.9	○
155	D	13	267	1	維摩詰経三観玄義	巻下	五・六	本文	27.5	88.8	23.4	15.9	33.1	○
155	D	13	267	2	維摩詰経三観玄義	巻下	七	本文	27.5	88.8	23.1	15.9	33.0	○
156	D	14	268	1	維摩詰経三観玄義	巻下	八・十二	本文	27.8	88.6	23.0	15.8	33.0	△
156	D	14	268	2	維摩詰経三観玄義	巻下	十三・十四	本文	27.8	88.6	23.1	15.9	33.1	△
157	D	15	263	1	維摩詰経三観玄義	巻下	九	本文	27.3	85.9	23.4	15.9	33.1	△
157	D	15	263	2	維摩詰経三観玄義	巻下	十・十一	本文	27.3	85.9	23.4	15.8	33.0	△
158	D	16	266	1	維摩詰経三観玄義	巻下	十五・十六	本文	25.1	86.4	23.2	16.0	33.2	×
158	D	16	266	2	維摩詰経三観玄義	巻下	十七・十八	本文	25.1	86.4	23.8	15.9	33.1	×
159	D	17	264	1	維摩詰経三観玄義	巻下	十九・二十	本文	24.5	85.5	23.1	15.8	32.8	×
159	D	17	264	2	維摩詰経三観玄義	巻下	廿一・廿二	本文	24.5	85.5	23.5	15.8	32.9	×

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
160	D	18	265	1	維摩詰経三観玄義	巻下	廿三・廿四	本文	27.3	85.4	23.4	15.8	33.0	△
160	D	18	265	2	維摩詰経三観玄義	巻下	廿五・廿六	本文	27.3	85.4	23.4	15.8	32.9	△
161	D	19	257	1	維摩詰経三観玄義	巻下	廿七・廿八	本文	27.3	89.6	23.1	15.9	33.1	○
161	D	19	257	2	維摩詰経三観玄義	巻下	廿九・三十	本文	27.3	89.6	23.2	15.8	33.0	○
162	D	20	258	1	維摩詰経三観玄義	巻下	三十一・三十二	本文	27.3	90.2	23.4	15.9	33.0	○
162	D	20	258	2	維摩詰経三観玄義	巻下	三十三終	本文・題箋・刊記	27.3	90.2	23.2	15.7	32.9	○
163	E	1	25	1	六妙法門	／	一	序	24.4	47.2	20.1	14.8	20.9	○
163	E	1	25	2	六妙法門	／	二	序	24.4	47.2	19.9	14.7	30.8	○
164	E	2	24	1	六妙法門	／	三	序	24.5	47.0	19.7	14.7	30.7	○
164	E	2	24	2	六妙法門	／	四	凡例	24.5	47.0	19.7	14.7	／	○
165	E	3	23	1	六妙法門	／	一	本文	24.5	47.0	20.2	15.0	31.2	○
165	E	3	23	2	六妙法門	／	二	本文	24.5	47.0	20.3	15.0	31.2	○
166	E	4	22	1	六妙法門	／	三	本文	25.0	46.6	20.6	15.0	31.2	○
166	E	4	22	2	六妙法門	／	四	本文	25.0	46.6	20.7	15.0	31.2	○
167	E	5	27	1	六妙法門	／	五	本文	24.5	47.1	20.0	14.7	30.8	○
167	E	5	27	2	六妙法門	／	六	本文	24.5	47.1	20.0	14.7	30.9	○
168	E	6	26	1	六妙法門	／	七	本文	24.3	47.0	20.2	15.0	31.2	○
168	E	6	26	2	六妙法門	／	八	本文	24.3	47.0	20.2	15.0	31.2	○
169	E	7	152	1	六妙法門	／	九	本文	24.3	47.2	19.9	14.7	30.7	○
169	E	7	152	2	六妙法門	／	十	本文	24.3	47.2	19.9	14.7	30.7	○
170	E	8	153	1	六妙法門	／	十一	本文	24.5	47.5	19.8	14.7	30.7	○
170	E	8	153	2	六妙法門	／	十二	本文	24.5	47.5	19.8	14.7	30.7	○
171	E	9	154	1	六妙法門	／	十三	本文	24.4	47.4	19.9	14.7	30.8	○
171	E	9	154	2	六妙法門	／	十四	本文	24.4	47.4	20.0	14.6	30.7	○
172	E	10	155	1	六妙法門	／	十五	本文	24.4	47.1	19.8	14.7	30.7	○
172	E	10	155	2	六妙法門	／	十六	本文	24.4	47.1	19.9	14.6	30.7	○
173	E	11	156	1	六妙法門	／	十七	本文	24.5	47.4	20.0	14.8	30.8	○
173	E	11	156	2	六妙法門	／	十八	本文	24.5	47.4	19.8	14.7	30.7	○
174	E	12	157	1	六妙法門	／	十九	本文	24.4	46.5	19.9	14.6	30.7	○
174	E	12	157	2	六妙法門	／	二十	本文	24.4	46.5	20.0	14.7	30.8	○
175	E	13	158	1	六妙法門	／	廿一	本文	24.4	46.8	20.2	14.7	30.8	○
175	E	13	158	2	六妙法門	／	廿二	本文	24.4	46.8	20.2	14.6	30.7	○
176	E	14	159	1	六妙法門	／	廿三	本文	24.6	46.8	19.9	14.7	30.8	○
176	E	14	159	2	六妙法門	／	廿四	本文	24.6	46.8	20.0	14.7	30.8	○
177	E	15	28	1	六妙法門	／	廿五	本文	24.4	47.3	20.1	15.0	31.2	○
177	E	15	28	2	六妙法門	／	序五	後序	24.4	47.3	20.1	15.0	31.2	○
178	E	16	18	1	六妙法門	／	／	見返	23.2	43.7	19.9	／	14.7	○
178	E	16	18	2	六妙法門	／	／	題箋・刊記	23.2	43.7	／	／	／	○
179	F	1	302	1	請観音経疏	／	一・三	本文	23.2	83.7	18.7	14.0	29.2	○
179	F	1	302	2	請観音経疏	／	十・十四	本文	23.2	83.7	19.0	14.0	29.2	○
180	F	2	306	1	請観音経疏	／	二・十七	本文	23.1	79.4	19.2	14.1	29.6	○
180	F	2	306	2	請観音経疏	／	四・八	本文	23.1	79.4	19.1	14.2	29.6	○
181	F	3	301	1	請観音経疏	／	五・廿	本文	23.1	79.2	19.0	14.2	29.6	○
181	F	3	301	2	請観音経疏	／	十五・十九	本文	23.1	79.2	19.4	14.2	29.7	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
182	F	4	305	1	請観音経疏	／	六・九	本文	23.3	79.0	19.0	14.1	29.3	○
182	F	4	305	2	請観音経疏	／	十一・十二	本文	23.3	79.0	19.3	14.1	29.5	○
183	F	5	262	1	請観音経疏	／	十三・十六	本文	23.2	79.1	19.3	14.1	29.5	○
183	F	5	262	2	請観音経疏	／	二十二・二十四	本文	23.2	79.1	19.3	14.2	29.5	○
184	F	6	260	1	請観音経疏	／	十八・二十	本文	23.0	78.7	19.4	14.1	29.5	○
184	F	6	260	2	請観音経疏	／	二十一・二十三	本文	23.0	78.7	19.4	14.1	29.5	○
185	F	7	300	1	請観音経疏	／	二十五・三十八	本文	24.1	80.8	19.2	14.1	29.5	○
185	F	7	300	2	請観音経疏	／	三十七・四十	本文	24.1	80.8	19.3	14.1	29.5	○
186	F	8	259	1	請観音経疏	／	二十六・三十九	本文	23.6	80.9	19.3	14.1	29.6	○
186	F	8	259	2	請観音経疏	／	二十八・二十九	本文	23.6	80.9	19.3	14.2	29.6	○
187	F	9	307	1	請観音経疏	／	二十七・三十	本文	23.7	80.8	19.3	14.0	29.5	○
187	F	9	307	2	請観音経疏	／	三十一・三十二	本文	23.7	80.8	19.4	14.1	29.5	○
188	F	10	310	1	請観音経疏	／	三十三・三十四	本文	23.6	80.2	19.7	14.1	29.5	○
188	F	10	310	2	請観音経疏	／	三十五・三十六	本文	23.6	80.2	19.2	14.1	29.5	○
189	F	11	309	1	請観音経疏	／	四十一・四十三	本文	23.7	79.7	19.0	14.0	29.5	○
189	F	11	309	2	請観音経疏	／	四十二・四十四	本文	23.7	79.7	19.0	14.1	29.4	○
190	F	12	304	1	請観音経疏	／	四十五・四十六	本文	24.1	81.1	19.3	14.1	29.5	○
190	F	12	304	2	請観音経疏	／	四十七・四十八	本文	24.1	81.1	19.3	14.2	29.5	○
191	F	13	308	1	請観音経疏	／	四十九・五十	本文	23.7	80.8	19.2	14.2	29.6	○
191	F	13	308	2	請観音経疏	／	五十一・五十二	本文	23.7	80.8	19.2	14.2	29.7	○
192	F	14	303	1	請観音経疏	／	五十三・五十四	本文	23.2	79.7	19.2	14.3	29.8	○
192	F	14	303	2	請観音経疏	／	五十五	本文・題箋・刊記	23.2	79.7	19.4	14.4	29.9	○
193	G	1	201	1	講演法華儀	巻上	三	本文	23.2	37.3	19.4	15.0	31.2	○
193	G	1	201	2	講演法華儀	巻上	四	本文	23.2	37.3	19.5	15.0	31.1	○
194	G	2	202	1	講演法華儀	巻上	七	本文	23.0	36.9	18.9	15.0	33.2	○
194	G	2	202	2	講演法華儀	巻上	八	本文	23.0	36.9	18.8	15.0	31.1	○
195	G	3	203	1	講演法華儀	巻上	九	本文	23.0	37.0	19.2	14.9	31.2	○
195	G	3	203	2	講演法華儀	巻上	十	本文	23.0	37.0	19.2	15.0	31.3	○
196	G	4	204	1	講演法華儀	巻上	十五	本文	22.9	36.9	19.2	15.0	31.3	○
196	G	4	204	2	講演法華儀	巻上	十六	本文	22.9	36.9	19.1	15.0	31.2	○
197	G	5	205	1	講演法華儀	巻上	二十三	本文	23.3	36.9	18.9	13.5	31.2	○
197	G	5	205	2	講演法華儀	巻上	二十四	本文	23.3	36.9	18.7	15.0	31.0	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
198	G	6	206	1	講演法華儀	巻上	二十五	本文	23.0	36.9	19.7	15.2	31.5	○
198	G	6	206	2	講演法華儀	巻上	二十六	本文	23.0	36.9	19.2	15.1	31.5	○
199	G	7	108	1	講演法華儀	巻上	二十七	本文	23.4	37.1	19.3	15.0	31.2	○
199	G	7	108	2	講演法華儀	／	／	凡例	23.4	37.1	19.4	15.0	31.3	○
200	G	8	109	1	講演法華儀	巻下	三	本文	22.9	37.1	19.0	14.9	31.9	○
200	G	8	109	2	講演法華儀	巻下	八	本文	22.9	37.1	19.2	14.9	31.1	○
201	G	9	110	1	講演法華儀	巻下	六	本文	23.0	37.0	19.1	15.0	31.2	×
201	G	9	110	2	講演法華儀	巻下	七	本文	23.0	37.0	18.9	15.1	31.3	×
202	G	10	111	1	講演法華儀	巻下	九	本文	23.0	36.7	18.7	14.8	31.2	○
202	G	10	111	2	講演法華儀	巻下	十	本文	23.0	36.7	18.8	14.9	31.1	○
203	G	11	112	1	講演法華儀	巻下	十一	本文	23.0	36.9	19.0	15.1	31.3	○
203	G	11	112	2	講演法華儀	巻下	十二	本文	23.0	36.9	19.1	14.9	31.3	○
204	G	12	113	1	講演法華儀	巻下	十三	本文	23.1	36.9	18.9	15.1	31.4	○
204	G	12	113	2	講演法華儀	巻下	十四	本文	23.1	36.9	18.8	15.0	31.3	○
205	G	13	114	1	講演法華儀	巻下	十五	本文	23.0	37.0	19.1	15.1	31.9	○
205	G	13	114	2	講演法華儀	巻下	十六	本文	23.0	37.0	19.1	15.1	31.4	○
206	G	14	115	1	講演法華儀	巻下	十七	本文	22.8	36.2	19.0	15.0	31.2	○
206	G	14	115	2	講演法華儀	巻下	十八	本文	22.8	36.2	19.1	15.1	31.4	○
207	G	15	209	1	講演法華儀	／	／	題箋	17.9	11.2	7.1	／	3.8	／
207	G	15	209	2	講演法華儀（裏面未刻）	／	／	／	17.9	11.2	／	／	／	／
208	G	16	210	1	講演法華儀	／	／	題箋	19.6	11.7	17.1	／	3.7	／
208	G	16	210	2	講演法華儀（裏面未刻）	／	／	／	19.6	11.7	／	／	／	／
209	H	1	208	1	四教略頌	／	一	本文	19.7	32.7	18.0	12.5	26.1	○
209	H	1	208	2	四教略頌	／	二	本文	19.7	32.7	18.0	12.6	26.3	○
210	H	2	119	1	四教略頌	／	三	本文	19.8	32.3	17.9	12.5	26.0	○
210	H	2	119	2	四教略頌	／	四	本文	19.8	32.3	17.9	12.5	26.1	○
211	H	3	207	1	四教略頌	／	五	本文	19.7	32.9	18.0	12.3	26.0	○
211	H	3	207	2	四教略頌	／	六	本文	19.7	32.9	17.9	12.3	26.1	○
212	I	1	116	1	五時略頌	／	一	本文	19.6	32.5	18.0	12.5	26.2	○
212	I	1	116	2	五時略頌	／	二	本文	19.6	32.5	18.0	12.5	26.2	○
213	I	2	117	1	五時略頌	／	三	本文	19.6	32.8	18.2	12.5	26.1	○
213	I	2	117	2	五時略頌	／	四	本文	19.6	32.8	18.2	12.5	26.1	○
214	I	3	118	1	五時略頌	／	五	本文	19.5	32.9	18.1	12.5	26.1	○
214	I	3	118	2	五時略頌	／	六	本文	19.5	32.9	18.0	12.4	26.1	○
215	J	1	53	1	般若心経夢性解	／	一	序	24.2	43.7	19.3	14.4	29.8	○
215	J	1	53	2	般若心経夢性解	／	二	序	24.2	43.7	19.4	14.4	29.8	○
216	J	2	151	1	般若心経夢性解	／	一	序	24.1	44.2	19.3	14.5	29.8	△
216	J	2	151	2	般若心経夢性解	／	二	序	24.1	44.2	19.2	14.4	29.8	△
217	J	3	52	1	般若心経夢性解	／	一	本文	24.2	44.0	19.5	14.4	29.8	○
217	J	3	52	2	般若心経夢性解	／	二	本文	24.2	44.0	19.2	14.3	29.8	○
218	J	4	54	1	般若心経夢性解	／	三	本文	24.2	44.1	19.6	14.7	30.1	○
218	J	4	54	2	般若心経夢性解	／	四	本文	24.2	44.1	19.5	14.5	30.0	○
219	J	5	55	1	般若心経夢性解	／	五	本文	24.2	44.5	19.4	14.5	30.0	○
219	J	5	55	2	般若心経夢性解	／	六	本文	24.2	44.5	19.5	14.5	30.3	○
220	J	6	56	1	般若心経夢性解	／	七	本文	24.0	44.1	19.3	14.5	29.8	○
220	J	6	56	2	般若心経夢性解	／	八	本文	24.0	44.1	19.2	14.5	29.9	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
221	J	7	19	1	般若心経夢性解	／	九	本文	24.0	44.6	19.6	14.7	30.2	○
221	J	7	19	2	般若心経夢性解	／	十	本文	24.0	44.6	14.7	14.7	30.3	○
222	J	8	21	1	般若心経夢性解	／	十一	本文	24.0	44.0	20.1	14.5	30.2	○
222	J	8	21	2	般若心経夢性解	／	十二	本文	24.0	44.0	20.1	14.5	30.3	○
223	J	9	20	1	般若心経夢性解	／	十三	本文	24.0	43.7	19.7	14.5	30.4	○
223	J	9	20	2	般若心経夢性解	／	／	広告	24.0	43.7	19.7	14.2	30.0	○
224	J	10	51	1	般若心経夢性解	／	／	見返・題箋	23.2	21.3	／	／	／	／
224	J	10	51	2	般若心経夢性解（裏面未刻）	／	／	／	23.2	21.3	／	／	／	／
225	K	1	282	1	不動尊秘密陀羅尼経	／	一	本文	18.3	51.8	13.8	／	27.8	△
225	K	1	282	2	不動尊秘密陀羅尼経	／	二	本文	18.3	51.8	13.7	／	34.8	△
226	K	2	283	1	不動尊秘密陀羅尼経	／	三	本文	18.2	53.3	14.2	／	35.2	○
226	K	2	283	2	不動尊秘密陀羅尼経	／	四	本文	18.2	53.3	14.2	／	35.2	○
227	K	3	284	1	不動尊秘密陀羅尼経	／	五	本文	18.2	52.9	14.1	／	35.1	○
227	K	3	284	2	不動尊秘密陀羅尼経	／	六	本文	18.2	52.9	14.1	／	35.2	○
228	K	4	285	1	不動尊秘密陀羅尼経	／	七	本文	18.1	53.1	14.1	／	34.9	○
228	K	4	285	2	不動尊秘密陀羅尼経	／	八	本文	18.1	53.1	14.2	／	34.8	○
229	K	5	286	1	不動尊秘密陀羅尼経	／	九	本文	18.3	53.1	14.1	／	35.2	○
229	K	5	286	2	不動尊秘密陀羅尼経	／	／	本文・刊記	18.3	53.1	14.0	／	35.2	○
230	L	1	211	1	礼法華経儀	／	／	内題	18.1	57.8	13.1	／	41.6	○
230	L	1	211	2	礼法華経儀	／	ホノ二	本文	18.1	57.8	13.1	／	42.5	○
231	L	2	217	1	礼法華経儀	／	ホノ三	本文	18.0	57.7	13.2	／	42.9	○
231	L	2	217	2	礼法華経儀	／	ホノ四	本文	18.0	57.7	13.2	／	42.1	○
232	L	3	218	1	礼法華経儀	／	ホノ五	本文	18.0	57.5	13.1	／	42.9	○
232	L	3	218	2	礼法華経儀	／	ホノ六	本文	18.0	57.5	13.0	／	43.0	○
233	L	4	213	1	礼弥陀懺儀	／	（アノ一）	本文	18.2	57.8	13.2	／	34.3	○
233	L	4	213	2	礼弥陀懺儀	／	アノ二	本文	18.2	57.8	13.2	／	34.3	○
234	L	5	216	1	礼弥陀懺儀	／	アノ三	本文	18.0	57.7	13.0	／	42.4	○
234	L	5	216	2	礼弥陀懺儀	／	アノ四	本文	18.0	57.7	13.0	／	42.8	○
235	L	6	212	1	礼弥陀懺儀	／	アノ五	本文	18.2	57.7	13.1	／	43.0	○
235	L	6	212	2	礼弥陀懺儀	／	アノ六	本文	18.2	57.7	13.1	／	42.7	○
236	L	7	214	1	礼弥陀懺儀	／	アノ七	本文	18.2	57.8	13.2	／	43.1	○
236	L	7	214	2	礼弥陀懺儀	／	アノ八	本文	18.2	57.8	13.2	／	43.1	○
237	L	8	287	1	礼弥陀懺儀	／	アノ九	本文	18.1	57.6	13.2	／	42.1	○
237	L	8	287	2	礼弥陀懺儀	／	アノ十	本文	18.1	57.6	13.3	／	43.0	○
238	L	9	215	1	礼弥陀懺儀	／	アノ十一	本文	18.1	57.8	13.2	／	42.7	○
238	L	9	215	2	礼弥陀懺儀	／	／	題箋・刊記	18.1	57.8	13.1	／	／	○
239	M	1	179	1	天台大師和讃	／	一	本文	12.0	35.0	10.2	／	32.7	／
239	M	1	179	2	天台大師和讃	／	二	本文	12.0	35.0	10.2	／	32.6	／
240	M	2	180	1	天台大師和讃	／	三	本文	11.7	34.9	10.1	／	32.6	／
240	M	2	180	2	天台大師和讃	／	四	本文	11.7	34.9	10.2	／	32.9	／
241	M	3	181	1	天台大師和讃	／	五	本文	12.3	34.8	10.1	／	32.8	／
241	M	3	181	2	天台大師和讃	／	六	本文	12.3	34.8	10.1	／	32.7	／
242	M	4	182	1	天台大師和讃	／	九	本文	12.1	34.9	10.0	／	32.8	／
242	M	4	182	2	天台大師和讃	／	十	本文	12.1	34.9	10.0	／	32.7	／
243	M	5	183	1	天台大師和讃	／	十一	本文	12.0	35.1	10.1	／	32.5	／

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
243	M	5	183	2	天台大師和讃	／	十二	本文	12.0	35.1	10.1	／	32.7	／
244	N	1	402	1	勤行式	／	一	本文	16.6	56.3	13.1	／	41.1	○
244	N	1	402	2	勤行式	／	二	本文	16.6	56.3	13.1	／	41.4	○
245	N	2	403	1	勤行式	／	三	本文	16.6	55.9	13.1	／	41.4	○
245	N	2	403	2	勤行式	／	四	本文	16.6	55.9	13.1	／	41.5	○
246	N	3	404	1	勤行式	／	五	本文	16.5	56.2	13.1	／	41.3	○
246	N	3	404	2	勤行式	／	六	本文	16.5	56.2	13.0	／	41.5	○
247	N	4	405	1	勤行式	／	七	本文	16.4	56.1	13.1	／	41.5	○
247	N	4	405	2	勤行式	／	八	本文	16.4	56.1	13.1	／	41.5	○
248	N	5	406	1	勤行式	／	九	本文	16.5	56.2	13.3	／	41.5	○
248	N	5	406	2	勤行式	／	十	本文	16.5	56.2	13.2	／	41.4	○
249	N	6	407	1	勤行式	／	十一	本文	16.1	56.5	13.2	／	41.5	○
249	N	6	407	2	勤行式	／	十二	本文	16.1	56.5	13.1	／	41.0	○
250	N	7	408	1	勤行式	／	十三	本文・附言	16.5	56.0	13.1	／	24.3	○
250	N	7	408	2	勤行式	／	十四	本文	16.5	56.0	13.1	／	41.0	○
251	N	8	401	1	勤行式	／	／	題箋	16.5	56.2	／	／	／	○
251	N	8	401	2	勤行式	／	／	刊記	16.5	56.2	13.1	／	25.4	○
252	O	1	275	1	晨昏課誦	／	一	本文	16.5	65.5	11.8	6.5	48.2	○
252	O	1	275	2	晨昏課誦	／	二	本文	16.5	65.5	11.6	6.6	48.6	○
253	O	2	274	1	晨昏課誦	／	三	本文	17.0	65.7	11.6	6.5	49.1	○
253	O	2	274	2	晨昏課誦	／	四	本文	17.0	65.7	11.7	6.9	48.8	○
254	O	3	276	1	晨昏課誦	／	五	本文	16.7	65.7	11.8	6.7	44.9	○
254	O	3	276	2	晨昏課誦	／	六	本文	16.7	65.7	12.0	6.5	46.5	○
255	O	4	277	1	晨昏課誦	／	七	本文	16.7	65.1	12.0	6.3	48.3	○
255	O	4	277	2	晨昏課誦	／	八	本文	16.7	65.1	11.7	6.5	48.5	○
256	O	5	278	1	晨昏課誦	／	九	本文	16.7	65.7	11.7	6.6	48.5	○
256	O	5	278	2	晨昏課誦	／	十	本文	16.7	65.7	11.1	6.8	48.6	○
257	O	6	279	1	晨昏課誦	／	十一	本文	16.7	65.6	11.8	6.6	48.6	○
257	O	6	279	2	晨昏課誦	／	十二	本文	16.7	65.6	11.9	6.9	48.9	○
258	O	7	280	1	晨昏課誦	／	十三	本文	16.7	65.3	12.1	／	49.1	○
258	O	7	280	2	晨昏課誦	／	十四	本文	16.7	65.3	12.1	／	48.3	○
259	O	8	281	1	晨昏課誦	／	十五	本文	16.6	65.6	11.9	／	46.4	○
259	O	8	281	2	晨昏課誦	／	十六	本文	16.6	65.6	11.7	／	48.8	○
260	O	9	273	1	晨昏課誦	／	／	本文・題箋	17.0	65.1	11.9	／	14.9	○
260	O	9	273	2	晨昏課誦（裏面未刻）	／	／	／	／	／	／	／	／	○
261	P	1	170	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	一	本文	17.5	37.8	15.0	10.6	21.5	○
261	P	1	170	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	二	本文	17.5	37.8	15.0	10.4	21.7	○
262	P	2	171	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	三	本文	18.0	37.4	15.2	10.4	21.6	○
262	P	2	171	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	四	本文	18.0	37.4	15.2	10.3	21.6	○
263	P	3	172	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	五	本文	18.0	37.8	15.0	10.4	21.5	○
263	P	3	172	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	六	本文	18.0	37.8	15.0	10.4	21.5	○
264	P	4	173	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	九	本文	17.2	37.7	15.0	10.4	21.7	○
264	P	4	173	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十	本文	17.2	37.7	15.0	10.3	21.7	○
265	P	5	174	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十三	本文	18.3	37.7	15.3	10.4	21.8	○
265	P	5	174	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十四	本文	18.3	37.7	15.2	10.5	21.6	○
266	P	6	175	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十五	本文	18.2	37.7	15.1	10.4	21.8	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
266	P	6	175	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十六	本文	18.2	37.7	15.0	10.4	21.7	○
267	P	7	176	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十七	本文	18.2	37.8	15.1	10.4	21.6	○
267	P	7	176	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十八	本文	18.2	37.8	15.1	10.3	21.8	○
268	P	8	177	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	十九	本文	18.1	37.8	15.2	10.3	22.0	○
268	P	8	177	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	二十	本文	18.1	37.8	15.3	10.1	21.7	○
269	P	9	178	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	二十一	本文	18.2	38.2	15.2	10.0	21.8	○
269	P	9	178	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	二十二	本文	18.2	38.2	15.3	10.0	21.6	○
270	P	10	169	1	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	／	題箋	18.2	38.0	10.2	／	2.4	○
270	P	10	169	2	因果経和讃・善悪種蒔鏡	／	／	刊記	18.2	38.0	15.1	／	17.6	○
271	Q	1	237	1	仏龍百絶	／	序	序	19.0	39.3	15.3	10.7	22.6	○
271	Q	1	237	2	仏龍百絶	／	序二	序	19.0	39.3	15.3	10.7	22.6	○
272	Q	2	238	1	仏龍百絶	／	本文	一	19.2	39.5	15.3	10.8	22.7	○
272	Q	2	238	2	仏龍百絶	／	本文	二	19.2	39.5	15.1	10.7	22.6	○
273	Q	3	239	1	仏龍百絶	／	本文	三	18.9	39.6	15.2	10.8	22.6	○
273	Q	3	239	2	仏龍百絶	／	本文	四	18.9	39.6	15.2	10.8	22.7	○
274	Q	4	240	1	仏龍百絶	／	本文	五	19.0	39.5	15.2	10.7	22.7	○
274	Q	4	240	2	仏龍百絶	／	本文	六	19.0	39.5	15.2	10.7	22.7	○
275	Q	5	241	1	仏龍百絶	／	本文	七	18.9	39.6	15.3	10.8	22.7	○
275	Q	5	241	2	仏龍百絶	／	本文	八	18.9	39.6	15.3	10.8	22.6	○
276	Q	6	242	1	仏龍百絶	／	本文	九	19.0	39.5	15.2	10.7	22.5	○
276	Q	6	242	2	仏龍百絶	／	本文	十	19.0	39.5	15.2	10.7	22.6	○
277	Q	7	243	1	仏龍百絶	／	本文	十一	18.9	39.4	15.2	10.8	22.7	○
277	Q	7	243	2	仏龍百絶	／	本文	十二	18.9	39.4	15.3	10.8	22.7	○
278	Q	8	244	1	仏龍百絶	／	本文	十三	19.0	39.5	15.1	10.7	22.6	○
278	Q	8	244	2	仏龍百絶	／	本文	十四	19.0	39.5	15.0	10.7	22.7	○
279	Q	9	245	1	仏龍百絶	／	本文	十五	18.9	39.7	15.3	10.8	22.7	○
279	Q	9	245	2	仏龍百絶（裏面未刻）	／	／	／	18.9	39.7	／	／	／	○
280	Q	10	236	1	仏龍百絶	／	／	見返・題箋	18.7	39.5	14.3	／	10.7	○
280	Q	10	236	2	仏龍百絶	／	跋	跋	18.7	39.5	15.3	10.8	20.7	○
281	R	1	315	1	梵漢対訳字類編	／	一・二・三	凡例	18.0	62.6	14.3	5.1	11.3	○
281	R	1	315	2	梵漢対訳字類編	／	四・五・六	凡例	18.0	62.6	14.3	5.1	11.2	○
282	R	2	312	1	梵漢対訳字類編	／	七・八・九	凡例	18.1	62.7	14.3	5.0	11.3	○
282	R	2	312	2	梵漢対訳字類編	／	十・十一・十二	凡例	18.1	62.7	14.3	5.1	11.0	○
283	R	3	313	1	梵漢対訳字類編	／	一・一・二	序・本文	18.0	62.4	14.2	5.0	11.3	○
283	R	3	313	2	梵漢対訳字類編	／	八・九・十	本文	18.0	62.4	14.1	5.1	11.3	○
284	R	4	317	1	梵漢対訳字類編	／	二・三・四	本文	18.1	62.6	14.1	5.2	11.5	○
284	R	4	317	2	梵漢対訳字類編	／	五・六・七	本文	18.1	62.6	13.9	5.3	11.5	○
285	R	5	314	1	梵漢対訳字類編	／	十一・十二・十三	本文	18.2	62.5	14.2	5.1	11.3	○
285	R	5	314	2	梵漢対訳字類編	／	十四・十五・十六	本文	18.2	62.5	14.0	5.2	11.5	○
286	R	6	316	1	梵漢対訳字類編	／	十七・十八・十九	本文	18.0	62.5	14.2	5.2	10.4	○
286	R	6	316	2	梵漢対訳字類編	／	廿三・廿四・廿五	本文	18.0	62.5	14.3	5.2	10.4	○

通番	経典番号	子番号	所蔵番号	表裏	書　　名	巻数	丁数	内容	寸法		匡郭			把手木
								本文・他	縦	横	縦	横1	横2	
287	R	7	311	1	梵漢対訳字類編	／	二十・廿一・廿二	本文	18.3	62.4	14.1	5.2	11.3	○
287	R	7	311	2	梵漢対訳字類編	／	廿六・廿七・廿八	本文	18.3	62.4	14.0	5.0	11.3	○
288	R	8	288	1	梵漢対訳字類編	／	／	見返・題箋・跋	18.1	62.8	／	／	／	○
288	R	8	288	2	梵漢対訳字類編	／	／	見返・刊記	18.2	63.0	／	／	／	○
289	S	1	62	1	霊峰宗論	巻三之二	十八	本文	23.9	43.2	20.0	14.2	29.8	○
289	S	1	62	2	霊峰宗論	巻七之二	十八	本文	23.9	43.2	20.5	14.2	29.9	○
290	S	2	63	1	霊峰宗論	巻三之二	十七	本文	24.0	43.1	19.9	14.0	29.6	○
290	S	2	63	2	霊峰宗論	巻七之二	十九	本文	24.0	43.1	20.0	14.1	29.8	○
291	S	3	64	1	霊峰宗論	巻九之四	二十一	本文	24.1	45.5	20.2	14.1	29.7	○
291	S	3	64	2	藕益大師宗論	／	／	見返・題箋	24.1	45.5	／	／	／	○
292	T	1	65	1	法語承習	／	十三	本文	20.0	40.8	17.2	12.1	25.5	○
292	T	1	65	2	法語承習	／	十四	本文	20.0	40.8	17.1	12.0	25.4	○
293	U	1	410	1	（題未詳／刊記）	／	／	刊記	22.5	41.2	19.5	13.6	28.9	○
293	U	1	410	2	（題未詳／刊記）（裏面未刻）	／	／	／	22.5	41.2	／	／	／	○
294	U	2	411	1	卒業証書	／	／	卒業証書	17.0	27.8	15.5	／	14.3	○
294	U	2	411	2	卒業証書（裏面未刻）	／	／	／	17.0	27.8	／	／	／	○
295	U	3	12	1	賞状	／	／	賞状	22.3	28.9	／	／	／	／
295	U	3	12	2	賞状（裏面未刻）	／	／	／	22.3	28.9	／	／	／	／
296	U	4	413	1	（題未詳）	／	下ノ三	本文	14.4	36.8	13.1	／	19.8	○
296	U	4	413	2	（題未詳）	／	下ノ四	本文	14.4	36.8	13.1	／	19.8	○
297	U	5	409	1	（題未詳）	／	／	本文	25.8	45.6	22.7	／	23.3	△
297	U	5	409	2	（題未詳）	／	／	本文	25.8	45.6	22.8	／	27.3	△